

つねよりことにきこゆる物元三の車の音又鳥の聲曉の
しはふき物の音はさらなり

繪に書てをとる物なてしこさくら山吹ものかたりにめてたしと
いひたる男女のかたち

かきまさりするもの松の木秋の野山里山路鶴鹿

冬はいみしくさむき

夏は世に知すあつき

あはれなる物孝ある人の子鹿の音よき男のわかきみたけさうし
したるいてゐたらんあかつきのぬかなと

あはれなりむつまじき人のめさましてきくらんおもひやるま

うつるほどのありさまいかならんとつつしみたるにたいらかにまう

てつきたるこそいとめてたけれゑほうしのさまさまなとそ猶人わるき

なをいみしき人ときこゆれとこよなくやつれてまうてつとこ

そはしりたるに

右衛門佐信賢は

あちきなき事也たたきよききぬをきてまうてんになてう事があらんかな
らすよもあしくてまうてよとみたけの給はしとて三月

つこもりにむらさきのいとこきさしぬきしるきあを山

吹のいみしくおとろおとろしきなとにてたかみつか殿守司

なるにはあを色の紅のきぬすりももろかしたるす

いかんはかまにてうちうちつつきまうてたりけるにかへる

人もまうつる人もめつらしくあやしき事にすへて

この山みちにかかるすかたの人見えさりつとあさましかりしを

四月つこもりにかへりて六月

十よ日のほどに筑前の守うせにしかはりになりにしこそけにいひ

けんにかかはすもと聞えしかこれはあはれなる事

にはあらねともみたけのついでなり

九月つこもり十月つ

いたちたたあるかなきかにききわけたるきりきりすの聲鶏の

子いたきてふしたる秋ふかき庭のあさちに露の色々玉のやうに

てひかりたる河竹の風にふかれたるゆふくれあかつきに

めさましたる夜なともすへておもひかはした

るわかき人の中にせくかたありて心にもまかせぬ山里の雪男も女も

きよけなるかくろき衣きたる廿六七日はかりのあかつきに物語

してゐあかしてみればあるかなきかに心ほそけなる月の山のはちかく見えた

る秋の野にすくしたるにそくたちのおこなひしたるあれたる家

にむくらはいかかりよもきなとたかくおいたる家に月のくまなくあかき
いとあらふはあたぬ風の吹たる

正月寺にこもりたるはいみしくさむく雪かちにこほりたるこそおかし
けれ雨などのふりぬへきけしきなるはいとわろしはつせなとにまう
ててつほねなとするほとはくれはしのもとに車引よせてたてるにお
いはかりしたるわかき法師はらのあしたといふ物をはきていささつ
つみもおりのほるとてなにもなき經のはしをよみ俱舎頌

をすこしいひつつけありくこそ所につけてはおかしけれ
我のほるはいとあやうくかたはらによりてかうらんをさへ

てゆくものをたいたしきなどのやうにおもひたるもおかしつほ
ねしたりなといひてくつとももてきておろすきぬかへさまにひきか
へしなとしたるもあり裳から衣なとこはなとこはしくさうそきたるもありふか
くつはうくわなとはきてらうのほなとくつすりいるはうちわたりめきて又
おかし内外などのゆるされたるわかき男とも家子なとまたたち

つつきてそこもとおちたる所に待りあかりたるなをしへゆくな
に物にかあらんいとちかくさしあゆみさいたつまのなをしはし人
のおはしますかくはましらぬわさなりなといふをけにとてすこし
たちをくるるもあり又ききもいれ

す我まつく佛の御前にと行もありつほねに行

ほとも人のいなみたる前をとをりゆけはいとうたてあるに
いぬふせきの中をみいれたる心ちいみしくたうとくなとて月比も
まうてす過しつらんとてまつ心もこさるみあかしやうとう
にはあらてうちに又人の奉たるおそろしきまてもえたる
に佛のきらきらと見え給へるいみしくたうとくに

てことに文をささけてらいはんにむかひてるきちかふさはかりゆ
すりみちてたれはとりはなちてききわくへくもあらぬにせめてしほりいた
したるこゑこゑのさすかに又まきれす千たんの御こころさしはなにか
しの御ためとはつかにきこゆをひうちかけておかみたてまつる
にここにかうさふらふといひてしきみの枝をおりてもてきたる
などのたうときもなをおかし犬ふせきのかたより法師

よりきていとよく申侍りぬいくかはかりこもらせ給へきなととふ
しかしかの人こもらせ給へりなといひきかせていぬる則
火おけた物なともてきつつかすはんさうにてに水なといれて
たらひのてもなきとあり御と■の人はかのはうになとい

ひてよひもていけはかはりかはりそ行す經のかねの音我ななりとき
くはたのもしくきこゆかたはらによるしき男のいとしのひやかにぬか

つくたちぬのほとも心あらんときこえたるかいたくおもひりた
るけしきにていもねす行ふこそいとあはれなれうちやすむほとは經た
かくはきこえぬほとによみたるもたうとけなりたかくうちいてさせま
ほしきにましてはななとをけさやかにききにくくはあらてすこししのひ
てかみたるはなにことをおもふらんかれをかなへはやと

こそおほゆれ日比こもりたるにひるはすこしのとかにそはやうはあ
りし法師の坊におのこともわらはへなとゆきてつれつれなるにたた
かたはらにかひをいとたかくにはかにふき出たるこそおとるかる
れきよけなるたてふみもたせたる男のす行のものうちをきて堂
童子なとよふこゑは山ひひきあひてきらきらしうきこゆ鐘のこゑ
ひひきまさりていつこならんときくほと
ならむ

とおほつかなくねんせまほしくこれはたたなるおりの事なめり正月
などにはたた物さはかしくものそきなとする人のひまなくまう
つるみるほとおこなひもしやられす日の打くるるにまうつ
るはこもる人なめり小法師はらのもたくへくもあらぬ屏風などの
たかきいとよくしんたいしたたみなとほうとたてをくとみれば
たたつほねにいててあぬふせきにすたれをさらさらと

かくるさまそいみしくしけたるやたはやすけそよそよとあ
またおりておとなたちたる人のいやしからすしのひやかなるけはひに
てかへる人にやあらん其中あやうし火の事せぬせよなといふもあ
り七八はかりなるおのこのあいきやうつきおこりたるこゑにてさぶ
らひ人よひ付ものなといひたけはひもいとおかし又三はか
りなるちこのねおひれてうちしはふきたるけはひうつくし

めのとの名ははなと打出たるも誰ならんといとしらまほし夜一夜
いみしうののしりおこなひあかすねもいらさりつるを後夜などは
てて少打やすみねぬるみにその寺の佛經をいとあらあらし
うたかく打出てよみたるにわざとたうとしともあらす修行

者たちたる法師のよむなめりとふと打おとる
かれてあはれにきこゆ又夜なとかほしらて人々しき人のおこなひ
たるかあをにひのさしぬきのわたいりたるしろききぬともあまたきて子とも
なめりとみゆるわかきおのこのおかしううちさうそきたる
わらはなとしてさぶらひの物ともあまたかしこまりいねうし

たるもおかしかりそめに屏風たててぬかなとすこしつくめりかほし
らぬはたれならんといとゆかししりたるはさなめりとみるもおかしわかき
人ともはとかくつほねともなどのわたりにさまよひて佛の御かたにめ

見やりたてまつらす別當なとよひてうちささめけはよひていぬるゑせものとはみえすかし二月晦三月朔日ころ花さかりにこもりたるもおかしきよけなる男とものしのふとみゆる三人さくらの青柳なとおかしうてくくりあ

けたるさしぬきのすそもあてやかにみなさるるつきつきしおのこにさうそくおかしうしたるゑふくろいたかせてことねりわらはとも紅梅もえきのかりきぬに色々のをしりもとるかしたるはかまなりきせたり花なとおらせて待めきてほそやかなるもの

なとくしてこんくうつこそおかしけれさそかしと見ゆる人あれといかてかはしらんうちすきていぬるもさすかにさうさうしけれは氣色を見せまし物をなといふもおかしかやうにて寺にこもりすへてれいならぬ所につかふ人のかきもしてあるはかひなくこそおほゆれ猶

おなしほとにてひとつ心におかしき事もささままにいひあはせつへき人かならずひとりふたりあまたもさそはまほしそのある人の中にくちおしからぬもあれともめなれてなるへし男なともさおもふにこそあめれわさとたつねよひもてありくめるは

いみしく心つきなきものはまつりみそきなとすへておのこの見る物見車にたたひとりの

物ゆかしとおもひたるなとひきよせても見よかしすきかけにたたひとりかかよひてこころのひとつにまもりぬたらむよ

わひしけに見ゆるもの六七月のむまひつしときはかりにきたなけなる車にえせ牛かけてゆるかし行物雨ふらぬ日はりむしろしたる車

ふる日はりむしろせぬもとし老たるかたいいとさむきをりもあつきにも下す女のなりあしきか子おいたるちいさきいたやのくるきかきたなけなるか雨にぬれたる

雨いたくふる日ちいさき馬にのりてせんくうし

たる夏はされとよし冬はたへ衣下かさねもひとつきあひたり

あつけなる物すいしんのおさのかりきぬのけさいてぬの少將いみしくこえたる人のかみおほかる六七月のす法の日中の時をこなふあさり

はつかしき物男の心の内いさとときよぬの僧みそかぬす人さるへきくまにかくれぬていかにみるらんたれかはしらんくらきまぎれにしのひやかにものとする人もあらんかしそれはおなし心におかしとやおもふらんよひの僧はいとはつかしき物なりわかき人々のあつまりては人のうへをいひわらひそしりにくみもするをつくつくと聞あつむるもはつかしあなうたてかしかましなと御前ちかき人々の物氣色はみいふ

をききいれすいひいひのはてはうちとけてねぬる後もはつか
し男はうたて思ふさまならずもとかしう心つきなき事ありとみれ
とさしむかひたる人をすかしたのむるこそはつかしけれまして情あ
りこのましき人にしられたるなどはをろかなりと思ふへくももてな
さすかし心の内にのみもあらず又みなこれかことはかれにかたりかれか
事はこれにいひきかすへかめるを我事をはしらてかくかたるをはこ
よなきなめりとおもひやすらんいてあはれ又あはしとおもふ人にあへは心
はなき物なめりとみえてはつかしくもあらぬものそかしいみしくあは
れに心くるしけに見すてかたき事などをいささかなに事とおもは
ぬもいかなる心そこそはあさましけれさすかに人のうへをはもとき物を
よくいふよことにたのもしき事もなき宮つかへ人なとをか
たらひてたたにもあらずなりにたるありさまなとをきようしてなともあめ
るは

むとくなる物しほひのかたなるおほきなるふねかみみしかき人のかつら
とりおろしてかみけつるほど大なる木の風に吹たうされてねをささ
けてよこたはれふせるすまひのまけているうしろ糸せ物のすかんかぶ
るおきなのもととりはなちなるたる

人のめなとのすするなる物えむしてかくれたるを
かならすさはかん物とおもひたるにさしもおもひたらずねたけにも
てなしたるにさてもえたひたちぬたらねは心といてきたるこまいぬしまふ
物のおもしろかりはやりていておとるあしをと

修法は佛眼眞言なとよみ奉りたるなまめかしく
たうとし

はしたなき物こと人をよぶに我がとてさしいてたる物ましてものと
らするおりはいとおのつから人のうへなと打いひそしりなとしたるをお
さなき人のききとりてその人のあるまへにいひてたるあはれなる事な
と人のいひてうちなくにけにいとあはれとは聞ながら
涙のふつといてこぬいとはしたなしなきかほつくりけしきことになせと
いとかひなしめてたき事をきくには又すするにたたいてきにこそいて
くれ八幡の行幸のかへらせ給に女院御さしきのあなたに御こしをと
とめて御そうそこ申させ給かよにしらすいみしきに誠にこほるれはけさう
てかしこまり申させ給かよにしらすいみしきに誠にこほるれはけさう
したるかほもみなあらはれていかに見くるしかるらんせんしの御使にて
たたのふの宰相の中將の御さしきにまいる給ひしこそいとおかしう見えしか
たたすいしん四人いみしうさうそきたるとも馬そひのほそうしたて
たるはかりして二條のおほちひろうきよきにめてたきに馬をうちはや

していそきまいりてすこしとをくよりおりてそはのみすのまへにさぶらひ給ひし院の別當そ申給し御返うけ給て又はしらせかへりまいり給ひて御こしのもとにてそうし給しほとにいふもをろかなりやさて内わたらせ給を見奉らせ給ぶらん女院の御心おもひやりまいらすはとひたちぬへくこそおほえしかそれにはなかなきをしてわらはるそかしよろしききはの人たになを此世にはめてたき物かうたにおもひまいらするもかしこしや

關白殿のくるとよりいてさせ給とて女房のらうにひまなくさぶらぶをあないみしのおもとたちやおきなをはいかにをこりとわらひ給ぶらんとわけ出させ給へはとくに人々の色々の袖くちしてみすをひ

きあ■たるに權大納言殿御くつとりてはかせ奉らせ給ふいと物々しうきよけによそをしげに下かさねのしりなかくところせ

くてさぶらひ給ふまつあなめてた大納言はかりの人にくつをとらせ給事みゆ山の井の大納言そのつきつきさらぬ人々こき物を

ひきちらしたるやうに藤つほのへいのもとよりとうくわてんのまへまでいなみたるにいとほそやかにいみしうなまめかしうて御はかしなとひきつくるひやすらはせ給に宮の大夫殿の清涼殿のまへにたたせ給へ

れはそれはあさせ給ましきなめりと見るほとにすこしあゆいてさせ給へはふといさせ給ひしこそ猶いかはかりのむかしの御おこなひのほとならんと見奉りしこそいみしかりしか中納言の君の忌の日とてくす

しかりおこなひ給ひしをたへそのすすしはおこなひてめてたき身にならんとかるとてあつまりてわらへと猶いとこそめてたけれ御前に聞召て佛になりたらんこそこれよりはまさらめとてえさせ給へる

に又めてたくなりてそ見まいらする大夫殿のぬさせ給へるをかへすかへすきこゆれば例のおもふ人とわらはせ給ふましてのちの御ありさま見奉らせ給はましかはことはりとおほしめされなまし

九月はかり夜一よふりあかしたる雨のけさはやみて朝日のはなやかにさしたるにせんさいのきくの露こほるはかりぬれかかりたるもいとおかしすいかいらんもむすすきなどのうへにかいたるくものすこほれのこりて所々にいともたえさまに

雨のかかりたるかしるきを玉をつらぬきたるやうなるいみしうあはれにおかしけれすこし日たけぬれは萩などのいと

おもけなりつるに露のおつるに枝のうちうこきて人もてふれぬにふとかみさまへあかりたるいとおかしいみしうおしとい

ひたる事人の心ちには露おかしからしとおもふこそ又おかしけれ

七日のわかなを人の六日までさはきとりちらしなどするに見もし
らぬ草を子とものもてきたるをなにとかこれをいふととみにもいはすい
さなとこれかれ見あはせてみみな草となんいふといふ物のあはれはむへな
りけりきかぬかほなるはなとわらふに又おかしけなるきくのおひいてた
るをもてきたれは

つめと猶みみな草こそつれなけれあまたしあれはきくもましれり
といはまほしけれとききいるへくもあらず

二月くわんのつかさにかう定といふ事するは何事にかあらんくしな
とは奉りてする事なるへしそうみやうとてうへにも色にもあや
しき物なとかはらけにもりてまいらす

頭辨の御もとよりとて殿守司系などやうなる物しるきしきにつつみて梅
の花のいみしくさきたるにつけてもてきたり繪にやあらんといそきとり
入てみればへいたんといふ物をふたつならへてつつみたるなりけりそへた
るたてふみにけもんのやうにかきてしん上へいたん一つつみれいによりて
進上如件少納言殿にとて月日かきてみきなどのなかゆきとておくにこ

のおのこはみつからまいらんとするをひるはかたちわるしとてまいらぬな
りといみしくおかしけにかき給たり御前に御覽せさせはめて

たくもかきたるかなおかしうしたりなとほめさせ給ひて御ふみはとらせ給つ
返事はいかかすへからんこのへいたんもてくるにはものなとやとらすら
んしりたる人もかなといふをきこしめしてこれなかかこゑしつるよひ

てとへの給はすれははしにいてて左大辨にものきこえんとさふらひして
いはすれはいとことうるはしうてきたるあらずわたくし事なりもし此辨
の少納言などのもとにかかる物もてきたる下部などにはする事やあると
とへはさる事も侍らすたととめてくひ侍なにしとはせ給ふもし

上官のうちにてえさせ給へるかといへはいかかはといらふたた返事をい
みしうあかきつすやうにみつからもてまうてこぬしもめはいとれいたうなり
となんみゆるとめてたき紅梅につけて奉るを則おはし

まして下部さふらふとの給へは出たるにさやうの物そ歌よみして
おこせ給へるとおもひつるにひひしくもいひたりつるかな女すこしわれは
とおもひたるは歌よみかましくそあるさらぬこそかたらひよけれまるなど
にさる事いはん人はかへりてむしんならむかしの給のりみつなり
やとわらひてやみにし事を殿のまへに人々いとおほかりけるに

かたり申給ひければいとよくいひたるとなむの給はせしと人のかたりしこ
れこそ見くるしき我ほめともなりかし

なとてつかさえはしめたる六位尺にしきの御さうしのたつみのすみの
ついたちのいたをせしそさらはにし東をもせよかしまた五位もせよ

かしなといふ事をいひ出てあちなき事とをきぬなとをまするなる
名ともつけむいとあやし衣の名にほそなかをはさもいひつへしなと
かさみはしりなかといへかしをのわらはのきるやうになそからきぬはみし
かききぬとこそいはめされとそれはもろこしの人のきる物なればうへの
きぬうへのはかまさいふへししたかさねもよし又おほくちなかさより
はくちのひろければはかまいとあちなしさしぬきもなそあし

のきぬもしはさやうのものはあしふくるなともいへかし

なとよろつの事をいひのしるをいてあなかしかまし今はいはしね給

ねといふいらへによるの僧のいとわろうらんよひひとときこそなを給のは
めとにくしとおもひたるこそさまにていひ出たりしもおかしかりしにそ
へておとろかれしか

こ殿の御ために月ことの十日御經ほとけ供養せさせ給ひしを九月十日
しきの御さうしにてせさせ給上達部殿上人いとおほかりせいはんかうしにて
とく事ともいとかなしければことにものあはれふるるましきわかき
人もみななくめりはてて酒などのみ詩すんしなとするに頭中將たたの

ふの君月秋として身いまいつくにかといふ事を打いたし給へりしか

はいみしうめてたしいかてかはおもひ出給へけんおはします所にわけまい
るほとにたちいてさせ給ひてめてたしないみしうけうのことにいひたる
ことにこそあれとの給はすればそれけいしにとて物も見さしてまいり侍り
つるなり猶いみしくめてたくこそおもひ侍れと聞えさすればましてさおほ
ゆらんとおほせらるる態よひもいてをのつからあふところにて

はなとかまるをまほにちかくはかたらひ給はぬさすかににくしなとおもひ
たるさまにはあらずとしりたるをいとあやしくなんさはかりとし比
になりぬるとくひのうとくてやむはなし殿上などに明暮なきをりもあ

らはなに事をおもひ出にせんとの給へはさらなりかたかるへき事にも
あらぬをさもあらん後にはえほめ奉らざらんか口惜なりうへ

の御前などにてやくとあつまりてほめきこゆるにいかてかたおほせか
しかたはらいたく心のおにいてきていひにくく侍なんものをといへはわ
らひてなとさる人しもよそめよりほかにほむるたくひおほかれとの給ふ
それかにくからずこそはあらめ男も女もけちかき人を

かたひき思ふ人のいささかあしき事をいへははらたちなとするか侘

しうおほゆるなりといへはたのもしけなの事やとの給ふもおかし

頭辨のしきにまいり給ひて物語なとし給ふに夜いとふけぬあす

御物いみなるにこもるへければうしになりなはあしかりなんとてまいり給ぬ
つとめて藏人所のかや紙引かさねて後のあしたはのこりおほかる心
ちなんする夜とをしてむかし物語もきこえあかさんとせしを鶏の

こゑにもよほされてといみしうきよけうらうへにことおほくかき給へ
るいとめてたし御かへりにいと夜ふかく侍ける鳥の聲はまうさうくんのか
やときこえたれはたちかへりまうさうくんにはとりかんこく關をひらき
て三千のかくわつかにされりといふこれはあふさかのせきの事成とあれ
は

夜をこめて鳥の空ねははかるとも世にあふさかの關はゆるさし

こころかしこき關守待めれときこゆたちかへり

あふさかは人こえやすき關なれは鳥もなかぬにあげて侍とか
とありし文ともをはしめのは僧都の君のぬかをさへつきてと

り給てき後々の御前はさて相坂の歌はよみへされて返事も

せずなりにたるいとわろしとわらはせ給さてその文は殿上人みな見てしは
との給へは誠におほしけりとはこれにてこそしりぬれめてたき事など

人のいひつたへぬはかひなきわさそかしまた見くるしけれ

は御文はいみしくかくして人に露みせ侍らぬ心さしのほとをくらふる

にひとしうこそはといへはかう物おもひしりていふこそ猶人々にはに

すおもへとおもひくまなくあしうしたりなとれいの女のやうにいはいはんとこ

そ思ひつるにとていみしうわらひ給こはなそよろこひをこそきこ

えめなといふ丸か文をかくし給ひける又猶うれしき事なり

いかに心うくつらからましいまよりもさをたのみきこえんなとの給ひて後

につねふさの中將頭辨はいみしうほめ給ふとやしりたりや一日の

文のつめてにありし事なとかたり給ふおもふ人々にほめらるるはい

みしくうれしくなとまめやかにの給ふもおかしうれしき事ふたつきてこ

そかのほめ給ふらんに又思ふ人の中に侍りけるをなといへはそれはめ

つらしういまの事のやうにもよろこひ給かなとの給

五月はかりに月もなくいとくらき夜女房やさぶらひ給ふと聲々してい

へは出て見よれいならすいふはたれそと仰らるれはいててこはた

そいとおとろおとろしうきはやかなるはといふにもものいはてすをもたけて

そよとさしいるはくれ竹の枝なりけりをいこの君にこそといひたるを

ききていまやこれ殿上に行てかたらむとて中將新中

將六位ともなとありけるはいぬ頭辨はとまり給ひてあやしくていぬるもの

ともかなおまへの竹をおりて歌よまんとしつるをしきにま

いりておなしくは女房なとよひて出てをといひてきつるを呉竹

の名をいととくいはれていぬるこそおかしけれたれかをしへを知て

人のなへてしるへくもあらぬ事はいふそなどの給へは竹の名ともしらぬ

物ともなまめかしとやおほしつらんといへは誠そえしらしなどの

給まめことなといひあはせての給へるにこの君とせうすといふ詩

を誦してまたあつまりきたれば殿上にていひきしつるほいもなくてはなとかへり給ひぬるそいとあやしくこそありつれとの給はさる事には何のい
らへもせんいと中々ならん殿上にてもいひのしりつればうへもきこし
めしてけうせさせ給つるとかたる辨もるともにかへ

すかえすおなし事を誦していとおかしければ人々出て見るとりとりにも
ともいひかはしてかへると猶おなし事をもちこゑに誦してさへもんの
陣にいるまできこゆつとめていとく少納言の命婦といふか御ふみまいら
せたりにこの事をけいしたればしもなるをめてさる事やありしと
はせ給へはしらすなにともおもはていひ出侍りしをゆきなりの朝臣のとり
なしたるにや侍らんと申せはとりなすともとうちゑませ給へりたれか事
をも殿上人ほめけりときかせ給をはいはるる人をよるこはせ給ふも
おかし

圓融院の御はての年みな人御ふくぬきなとしてあはれなる事をおほやけ
よりはしめて院の人も花のころもなといひけん世の御事

なとおもひいつるに雨いたうふる日藤三位のつほねにみのむしのやう
なるわらはのおほきなる木のしるきにたてふみをつけてこれたてまつ
らんといひければいつよりそけふあす御ものいみなれば御しとみもま
いらぬそとてしもはたてたるしとみのかみよりとりいれて
かみについさしてをきたるをつと

めてあらひてその巻數とこいてふしおかみてあげた

れはくろみいろといふしきしのあつこえたるをあやしとみてあげもてゆけは
老法師のいみしけなるかてにて

これをたにかたみとおもふに都には葉かへやしつるしぬ柴の袖

と書たりあさましくねたかりけるわさかなたれかしたるにかあらん仁

和寺僧正さにやとおもへとよにかかる事の給はしなを誰な

らん藤大納言その院の別當におはせしかはそのし給へる事なめりこ

れをつへの御まへ宮なるとうきこしめさせはやとおもふにいと心もと
なけれと猶おそろしういひたる物いみをしはてむと念し

くらして又のつとめて藤大納言の御もとにこの御返事をしてさしをかせた
れは則又返してをかせ給へりけりそれをふたつなからとりてい

そきまいりてかかる事なん侍りしとうへもおはします御前にてかた

り申給を宮はいとつれなく御覽して藤大納言のてのさまにはあらて

法師のにこそあめれと

のたまはずればさはこはたれかしわさにかすきすきしきかんだ

ちめ僧かうなどはたれかはあるそれにやかれにやなとおほめきゆかしかり

給にうへこのわたりに見えしにこそはいとよくにためれとう

ちほほえませ給ひていま一すち御つしのもとなりけるをとり出させ給
つれはいてあな心うこれ仰られよかしらいたやいかて

きき侍らんとたたせめにせめ申てうらみ聞えてわらひ給にやうやう仰
られていて御つかひにいきたりけるをおにわらははたてま所の年
といふ物のともなりけるをこひやう系かかたらひいたしたるにやあ
りけんたと仰らるれば宮もわらはせ給を引ゆるかし奉りて

なとかくはからせおはします猶うたかひもなくてをうちあらひてふし
をかみ侍し事よわらひねたかりぬ給へるさまもいとほこりかに

あいきやうつきておかしさてうへの大はん所にもわらひのしりて

つほねにおいてこのわらは尋いててふみとりいれし人にみすればそれに
こそは侍るめれといふたれか文をたれかとらせしそといへは
しれしれと打ゑみてともかくもいはてはしりにけり藤大納言

のちにききてわらひけうし給ひけり

つれつれなる物所さりたる物いみむまおりぬすくるくちもくにつかさえ
ぬ人の家雨うちふりたるはましてつれつれなり

つれつれなくさむ物語こそくろく三四はかりなるちこ

の物おかしういふ又いとちいさきちこのものかたりしたるかゑな
といふ事したるくた物おとこのうちさるかひ物よくいふかき

たるにもいみなれといれつかし

とり所なき物

かたちにく

けに心あしき人

みそひめのぬりたるこれいみしうわろき事いひた

るとよろつの人にくむなる事とていまとむへきにもあらず又あとひ

の火はしといふ事なとてかよになき事ならねはみな人しりたらんけにか

きいて人の見るへき事にはあらねとこのさうしをみるへきものとおも

はさりしかはあやしき事をもにくき事をもたたおもはん事のかきりを

かかむとてありし也

なおよにめてたき物りんしのまつりのおまへはかりの事に

かあらんしかくもいとおかし春はそらのけしきのとかにてうらうらと

あるに清涼殿の御前の庭につほもかもりつかさのたたみともを

しきてつかひは北面に舞人は御前のかたにこれらはひか事

にもあらん所の衆ともつかさねともとりてまへことにすゑわた

しへいしうもその日は御前にいてゐるそかしこきや殿上人

はかはるかはるさかつきとりてはてにはやくかひといふ物

おのこなんとのせんだにうたてあるを御前

に女そいてとりけるおもひかけす人やあらんともしらぬにひたきやよ
りさしいておほくとらんとさほくものはなかなかうちこほしてあ
つかふほとにかるらかにふとり出ぬ物にはをくれぬかしこきおさめ
殿にひたきやをしてとりいるこそおかしけれかんもりつかさの物
ともたたみとるやをそきと殿守司官人ともてことにははきとりすな
ならず承香殿の前のほとに笛ふきたてひやうしうちてあそぶをとく
いてこなんとまつにうとはまうたひて竹のませのもとにあゆみ出てみこ
とうちたるほとなとたたいかにせんとそおほゆるや一のまひのいとうる
はしく袖をあはせてふたりはしり出てにしにむかひてたちぬつき
つきいつるにあしふみをひやうしにあはせてはむひのをつくるひかうぶりき
ぬのくひなとつくるひてあやまもなきみもなとうたひてまひ
たちたるはずへていみしくめてたしおほひれなとまふひひき一
日みるともあくましきをはてぬるこそいとくちおしけれとまたあるへしと
思ふはたのもしきにみことかきかへしてこの度やかてたけのうしろか
らまひいててぬきたれつるさまとものなまめかしさはいみしくこそあれかひ
ねりの下かさねなとみたれあひてこなたかなたにわたりなとしたる
いてさらにいへはよのつねなりこのたひは又もあるましければにやいみし
くこそはてなんことはくちおしけれ上達部なともつつきて出給ひ
ぬれはいとさうさうしうくちおしきにかもの臨時のまつりはかへりたる
御神樂などにこそなくさめらるれ庭火のけふりのほそこのほりたるに神
樂の笛のねおもしろふわなきほそ吹すましたるに歌の聲
もいとあはれにいみしくおもしろくさえのほりてたちたるき
ぬもいとつめたうあぶきもたるてのひゆるもおほえすさえのおのこともめ
してとひきたるも人長の心ちよけさなとこそいみしけれさとなる
ときはたたわたるを見るにあかねは御社までゆきてみるおりもありお
ほきなる木のもとに車たてたれは松のけふりたなひきて火の
かけにはんひのをきぬのつやもひるよりはこよなくまさりて見ゆるは
しのいたをふみならしつっこ象あはせてまふほともいとおかしきに水
のなかるるをと笛の聲などのあひたるは誠に神もうれしとおほ
しめすらんかし良少將といひける人の年ごとに舞人のにてめてたき
物におもひしみにけるなくなりて上の御社の一のはしのしたにあんな
るをきけはゆゆうせちに物おもひいれしとおもへとなをこのめ
てたき事をこそさらにえおもひすつましけれ八幡の臨時の祭の
なこりこそいとつれつれなれなとてかへりてまたまふわさをせさりけんさら
はおかしからましるくをえてうしろよりまかへるこそくちおしけれなといふ
をつへの御前にきこしめしてあすかへりたらんめしてまはせんなど仰

らる誠にやさふらふらんさらはいかにめてたからんなど申うれしかりて宮の御前にもなをそれまはせさせ給へとあつまり

かなとさしもやあらさらんすらむとうちたゆみたるに舞人のまへにめすをききつけたる心ちものにあたるはかりさはくもいと物くるをしくしたにある人々まとひのほるさまこそ人の従者殿上人などの見らんもしらすも頭もうちかつきてのほるをわらふもことほりなり

古殿なとおはしまさて世中にこといとき物さはかしくなりて宮又うちにもいらせ給はす小一條といふ所おはしますになにともなくうたてありしかはひさしう里にゐたり御前わたりのおほつかなさにそなをえ

かくてはあるましかりける左中將おはして物語し給ふけふは宮にまいりたれはいみしく物こそあはれなりつれ女房のさうそくもからきぬなとのおりにあひたゆまずおかしうてもさふらふかなみすのそはのあきたるよりみいれつれば八九人はかりゐてきくちはのからきぬうす色の裳し

をんはきなとおかしういなみたるかなおまへの草のいとたかきをなとかこれはしけりて侍はらはせてこそといひつれば露をかせて

御覽せんとてことさらにと宰相の君の聲にていらへつるなりおかしくもおほえつるかな御里ゐいと心うしかかる所にすまひせさせ給はんほとはいみしき事ありともかならずさふらふへきものにおほしめされたるかひもなくなとあまたいひつる語りきかせ奉れとなめりかしまいりて見

給へあはれけなる所のさまかなるたひのまへにうへられたりけるほうたんのからめきおかしき事などの給いさ人のにくしとおもひたりしかは又ききにくく侍しかはといらへきこゆおひらかにもとてわらひ給け

にいかならむとおもひまいらす御氣色にはあらてさふらふ人たちの左大殿のかたの人しるすちにてありなとささめきさしつとひてもものなといふにしもとよりまいるをみてはいひやみはなちたてたるさまに見ならはずにくければまいれなとある度々の仰をも過

してけにひさしうなりにけるを宮の辨にはたたあなたかなたになししてそら事なともいてくへしれいならず仰事なともなくて日ころになれ

は心ほそくてうち詠むるほとおさめふみをもてきたりおまへより左京の君してしのひてたまはせたりつるといひてここにてさへひきしのぶもあまりなり人つての仰事にはあらぬなめりとむねつふれてあけ

たれはかみにはものもかかせ給はす山吹の花ひらたたひとつをつつませ給へりそれには思ふそとかかせ給へるをみるもいといみしうひころのたえまおもひなけれつる心もなくさみてうれしきにまつしるさまをおさ

めもうちまもりて御前にはいかにものおりことにおほしいてきこえさせ給

なる物をとてたれもあやしき御なかるとのみこそ侍めれなとかまいらせたまはぬなといひてこなる所にあからさまにまもりてまいらんといひていぬる後に御返事かきてまいらせんとするに此歌のもとにきよくわすれたるとあやしむることといひなからしらぬ人やはあることもとに

おほえなからいひ出られぬはいかにそやなといふをききてちいさきわらはのまへにゐたるかした行水のごとこそ申せといひたるなとてかくわすれつるならんこれはをしへらるるもおもふもおかし御かへりまいらせてすこしほへてまいりたるいかかといよりはつつまじうて御木丁にはたかくれたるをあれはいままいりかなとわらはせ給ひてにくき歌なれとこのおりはさもいひつへかりけるとなん思ふを見つけてはしはしえこそな

くさむましけれなどの給はせてかはりたる御氣色もなしわらはにをしへられたりし事なとけいすれはいみしくわらはせ給てさる事そあまり

あなつるふる事はさもありぬへしなと仰られてついでに人のなそなそあはせせし所にかたへにはあらてさやう事にらうらうしかりける

かたの一はんにをのれいらんさおもひ給へなとたのむるにさりともわるき事にいひ出しえりさたむ

るにその事はきかんいかになとふたたまかせて物し給へさ申ていとくちおしうはあらしといふをけにとおしはかり日いとちかうなりぬれはなをこの事の給へひさうにおなし事もこそあれといふにさはいさしらすさらはあなたのまれそなとむつかりければおほつかなしとおもひながらその日になりてみなかた人の男女あわけて殿上人なとわかき人々

おほくぬなみてあはするに左の一番にいみしうようゐしてもてなしたるさまのいかなる事をかいひいてんとみえたれはあなたの人もこなたの人も心もとなくうちまもりてなそなそといふほといと心もとなし天にはりゆみといひ出たり右の方人はいとけうありとおもひたるにこなたのかたの人は物もおほえずあさまじうなりていとにくくあひゆくあなたに

よりてことさらにまけさせんとおもひけるをしらてなとかた時のほとにおもふに右の人をこにおもひてうちわらひてややさらにしらすとくちひきたれてさるかうしかくるにかすさせさせ

とてさせついであやしき事これしらぬ物たれかあらんさらにかすましとろんすれとしらすとはいひ出んはなとてかまくるにならさらんとてつきつきのもこの人にろんかたせけるいみしう人のしりたる事なれとおほえぬ事にはさこそはあれなにしかはえしらすといひしと

のちにうらみられてつえさりける事をかたり出させ給へはおまへなるかきりはさはおもふへしくちおしくおもひけんこなたの人の心ちききはしめたりけんいかににかりけんなどわらふこれはわすれたる事は

みな人しりたる事にや

正月十日空いとくらぶ空もあつくみえなからさすかにはい
とけさやかにてりたるに糸せ物の家のうしろあらはたけなといふも
ののつちもうるはしうなるからぬに桃の木わ
か立ていとしもかたにさし出たる

かたつかたはあをくいまかた枝はこくつややか
にてすわうの日影にみえたるか

ほそやかなるわらはのかりきぬはなげやなと
してかみはうるはしきかのほりたれはひきは

こへたるおのこはうくわはきたるなと木の本に
立てわれによき木きりていてなとこぶに又かみおかしけなる

わらへのあこめともほころひかちにてはかまはなへたれといろなとよ
きうちきたる三四人うつちの木のよからん

きりてをこそここにめすそなといひておろしたれは
はしりかいとりわきわれにおほくなといふこそおかし

けれくろきはかまきたるおのこはしりきてこぶにまでなといへ
は木の本によりてひきゆるかすにあやうかりてさるのやうにかひつ

きてをるもおかし梅などのなりたるおりもさやうにそあるかし
きよけなるおのこのすくろくを曰

ひというちてなをあかぬにやみしかきとうたいに火をあかくか
かけて

かたきのさいをこひせめてとみにもいれぬはとうをはんのうへにたてて
まつかりきぬのくひのかほにかかれはかたてしてをしいていとこはか
らぬゑほうしをぶりやりてさいいみしうのるぶともうちはつしてんやと
心もとなけにうちまもりたるこそほこりにみゆれ

こをやんことなき人のうつとてひもうちときないかしるな
る氣色にひろひをくにをとりたる人のぬすまひもかしこまりたるけしきに

こはんよりはすこしとをくてをよひつつ袖のしたいまかたてにてひき
やりつつうちたるもおかし

おそろしけなる物つるはみのかさやけ所水ふうきひしかみおほかる男
のかしらあらひてほすほと栗のいか

きよしと見るものはらけあたらしきかなまりたたみにさすこも水を物に
いるるすきかけあたらしきほそひつ

きたなけなるものぬすみのすみかつとめて手をそくあらぶ人しろきつきはな
すすはなしありくちこあふらいるる

ものすすめの子あつきほとに久しくゆあみぬ衣のなへたるはいつれもいつれも

きたなけなる中にねり色の衣こそきたなけれ

いやしけなる物しきふのそうのさくくろきかみのすちぶときぬの屏風
のあたらしきふりくるみたるはさるいふかひなき物にて中なか何ともみ
えずあたら敷したててさくらの花おほくさかせてこふんさなとい
るとりたる糸かきたるやり戸つしなにもゐ中物はいやしけな
り薙はりの車のすけひいしのはかまいよすのすちぶとき人

の子に法師子のふとりたる誠の出雲むしろのたたみ
むねつふるる事くらへ馬もとゆひよるおやなどの心ちあしうしてれい
ならぬ氣色なるまして世中なとさいかしき比よるつ

おほえすものいはぬちこのなきいりてちものますいみしくめのとのいたく
にもやまでひさしうなきたるけところなにてことに又

いちしるからぬ人のこゑききつけたることはり人などのそのうへなと
いふにまつこそつふるれいみしくにくき人のきたるもいみしくこそあれ

よへきたる人のけさのふみ

のをそききく人さへつふるおもふ人のふみとりてさしいてたるも
又つふる

うつくしき物うりにかきたるちこのかほすすめの子のねすなきするにおとり
くる又へになとつけてすへたれはおやすめのむしなともてきてくむ
るもいとらうたし二はかりなるちこのいそきてはいくるみちにいと

ちいさきちりなとのありけるをめさとに見付ていとおかしけなるおよひに
とらへておとななどに見せたるいとうつくしあまにそきたる

ちこのめにかみのおほひたるをかきはやらてうちかたぶきてものなど見
るもいとうつくしたすきかけにゆひたるこしのかみのしろうをかしけなるも
見るにうつくしおほきにはあらぬ殿上わらはのさうそきたてられてありくも
うつくしおかしけなるちこのあからさまにいたきてうつくしむほと

にかひつきてねいりたるもらうたしひぬなのてうとはちすのうさ葉のい
とちいさきを池よりとりあけて見るあぶひのちいさきもいとつ

くしなにもなにもちいさきものはいとつくしいみしうこえたるち
この二斗なるかしろううつくしきかふたあゐのうす物なときぬな

かくてたすきあけたるかはい出たるもいとつくし

八九十はかりなるお

のこのこゑおさなけにてふみよみたる聲いとつくしうおはす鶏
のひなのあしたかにしろうおかしけにきぬみしかけなるさましてひよひよ
としてかしかましくなきて人のしりに立てありくも又おやのも

とにつれたちてありくみるもうつくしかりのこのつほねな

てしこの花

人はへするものことなる事なき人の子のかなしくならはされ

たるしはふきはつかしき人に物いはんとするにもまつさきにたつあなたこ
なたにすむ人の子ともの四五なるはあやにくたちて物なとりちら

してそこなふをつねはひきはられなとせいせられて心のままにもえあらぬか
おやのきたるにとこるえてゆかしかりたる物をあれ見せよやははなとひき
ゆるかすにおとななどのものいふとてふともききいれねはてつからひきさ
かし出て見るこそいとにくけれそれをまさなとはかりうちいひて

とりかくさてさなせそとそこなふなとはかりうちゑみていふおやも
にくしわれはたえはしたなくもいはてみるこそ心もとなけれ

名おそろしき物あをふち谷のほらはたいたくろかねつちくれいか

つちは名のみならずいみしうおそろしはやちぶさうくもほこほしおほか
みうしはさめらうろつのをさい

にすしそれも名こそはみるおそろしなはむしろかうたう又よろつに

おそろしひちかかさ雨

くちなはいちこいきす玉おにとこるおにわらひむはらからた

ちいかすみほうたんうしおに

見るにことなる事なき物文字にかきてことときいきちこ露草

水ぶうきこもくるみ文章博士皇后宮權大夫山

ももいたとりはましてとらのつゑとかきたるとつゑな

くともありぬへきかほつきを

むつかしけなる物ぬいものうらねこのみみのうちねすみのいまたけも
おいぬをすの中よりあまたまるはし出たるうらまたつかぬかはき

ぬのぬいぬももほときことにきよけならぬ所のくらきこと

なること人のちいさき子ともなとあまたもちてあつかひたるいとふかう
しも心さしなき女の心ちあしうしてひさしくなやみたるも男の心の内
にはむつかしけなるへし

ゑせ物の所うるおりの事正月のおほね行幸のおりのひめまうち君

六月十二月のつこもりのよおりの藏人季の御讀

經の威儀師あかけさ聞て僧の名ともよみあけたるいととき

らきらし宮のへのまけいをとも御と經佛名などの御そつそくの所

衆春日の祭のとねりとも大きやうの所のあゆみ正月のくす

りのこうつゑのほうし

五節の心みのみくしあけ

せちゑの御はいせんのうねめ大饗の日の史生七月のすまぬ雨ふる

日の市女笠わたりするおりのかんとり

くるしけなる物夜なきといふ物するちこのめのおもふ人ふたりもちてこ

なたかなたにうらみふすへられたる男こはき物のけにあつかりたるけん
しやけんたにはやくはよるへきをさしもなきをさすかに人わらはれ
にあらしとねんするいとくるしけなりわりなく物うたかひする男にいみ
しうおもはれたる女一の所にときめく人もえやすくはあらねとそれ
はよかめり心いられたる人

うらやましき物經などならひていみしくたとたとしくてわすれかちに
てかへすかへすおなし所をよむに法師はことほり男も女もくる
くるとやすらかによみたるこそあれかやうにいつのおりふとおほゆ
れ心ちなとわつらひてふしたるにうちわらひ物いひおもふ事なけ
にてあゆみありく人こそいみしくうらやましけれいなりに思ひをこして
まいりたるに中のみやしるのほとわりなくくるしきを念してのほるほ
とにいささかくるしけもなくをくれてくと見えたる物とものたたゆきに
さきにたちてまうつるいとうらやまし二月むまの日のあかつきにいそぎ
しかと坂のなからはかりあゆみしかはみるときはかりになりけりやうやう
あつくさへなりて誠にわひしうかからぬ人も世にもあらん物
をなにしにまうてつらんとまて涙おちてやすむ

に卅あまりはかりなり女のつほさうそくなとはあらてたたひきはこ
へたるか丸は七たひまうてし侍そ三たひはまうてぬいま四度はこと
にもあらずひつしには下かうしぬへしと道にあひたる

人にうちいひてくたりゆきしこそたたなる所にてはめもとまるましきこと
のかれか身にたたいまならばやとおはえしか男女も

法師もよき子もたる人いみしううらやましかみなかくうる

はしうさかりはなとめてたき人やんことなき人の人に

かしつかれ給もいとうらやまし手よくかき歌よくよみて物のおり
にもまつとり出らるる人

よき人の御前に女房いとあまたさふらぶに心にく

き所へつかはすへき仰かきなとをたれもとりのあとのやうにはな

とかはあらんされとしもなとにあるをわさとめて御すすりとりろし

てかかせ給うらやましさやうの事は所のおとな何となりぬれは

誠になには渡りのとをからぬもことにしたかひてかくをこれはさは

あらて上達部のもと又はしめてまいらんなど

つくるはせ給へるをあつまりてたはふれ

にねたかりいふめりことふみならふ又さこそはまたしきほとはかれ

かやうにいっしかとおほゆへかめれ内春宮の御めのとうへの女房の御かた

かたゆるされて三

味たててよひあかつきにいのられたる人すくろくうつにかたきのさいききた

るまことに世をおもひすてたる聖

とくゆかしき物まきそめむらくくり物なと染たる人の子うみたる男
女とくきかまほしよき人はさらなり糸せ物けすのきはたにきかまほしち
もくのまたつとめてかならずする人のさるへきなとかなきおりもきかま
ほしおもふ人のおこせたるふみ

心もとなき物人のもとにとみの物ぬいにやりてまつほと物見にいそき出
ていまやいまやとくるしうみはりつつあなたをまもらへたる心ち子うむへき
人のほとすくるまでさるけしきのなき遠所よりおもふ人の文をえ

てかたくふんしたるそくいなとはなちあくる心もとなし物見にい
そきいて事なりにけりしろきしもとなと見付たるにちかくやりよする

ほとわひしうおりてもいぬへき心ちこそすれしられしとおもふ人のあるにま
へなる人にをしへて物いはせたるいつしかと待いてたるちこのいかももか
なとなりたる行糸いと心もとなしとみの物ぬふにくらき

おりにはりにいとすくるされと我はさる物にてありぬふ所をとらへて
さしいれぬをいてた

なすけそとこへとさすかになとかはと思かほにえさらぬにくささへそ
ひぬなに事にもあれいそきて物へ行おりまつ我さるへき所

へ行とてたたいまをこせんとていぬる車まつほとこそ心もとな
けれおほちいきけるをさなりけるとよるこひたれはほかさまにい
ぬるいとくちおしまして物見にいてんとてあるに事はなりぬらん

と人のをきくこそ侘しけれ子うみたる人ののちの事

ひさしき物見にや又寺まつてなとにまいるとてもるともにあるへ
き人をのせにいきたるを車さしよせてたてるかとみにものらて待す

るもいと心もとなくうちすてもいぬへき心ちそするとみにていりすみを
こすいとひさし人の歌の返しとくすへきをえよみえぬいと心も

となしけさう人なとはさしもいそくましけれとをのつから又さるへきおり
もあり又まして女も男もたたにいひかはすほとはときのみこそはとおも
ふほとにあひなくひか事もいてくるそかし又心ちあしく物おそろしき

ほと夜のおくるまつこそいみしう心もとなけれまつはくるめのひるほ
とも心もとなし

古殿の御ふくのころ六月のつこもりの御はらへといふ事にい

てさせ給ふへきをしきの御さうしはかたあしとて官のつかさのあひたる所に
わたらせ給へりその夜はさはかりあつくわりなきやみにて何事も
せはう

かはらぶきにてさまことなりれいのやうにかうしなともなくたため
くりてみすはかりをそかけたる中々めつらしうおかし女房庭

におりなとしてあそふせんさいにはくわんさうといふ草をませゆひてとお
ほくうへたりける花きはやかにふさなりてさきたるむへむへしき所のせん
にはよし時つかさなとはたたかたはらにてかねのをともれい
にはにすぎこゆるをゆかしかりてわかき人々廿餘人はかりそなたに行
てはしりよりたかき屋にのほりたるをこれより見あくればうすに
ひのもからきぬおなし色のひとへかさね紅のはかまともをきてのほり
たちたるはいと天人なとこそいふましけれと空よりおりたるにやとそみ
ゆるおなしわかさなれとおしあけられたる人はえましらてうら山しけに見
あけたるもおかし日暮てくらまきれにそ過したる人々みなたちましり
て右近の陣へ物見にいてきてたはふれさはきわらふもあめりしをかう
はせぬ事也上達部のつき給ひしなとに女房とものほり上官な
とのゐるしやうしをみなうちとをしそこなひたりなとくるしかる物とも
あれとききもいれす屋のいとふるくてかはらふきなれはにやあらんあつさの
よにしらねはみすのによるもふしたるにふるき所なればむか
てといふ物の日一日おちかかりはちのすのおほきにてつきあつまりたるな
といとおそろしき殿上人日こにまいる夜もぬあかし物いふをききて
秋はかりにや大政官のちのいまやかぬにならん事をとすしいてたり
し人こニおかしかりしか秋になりたれとかたへすすしからぬ風の所
からなめりさすかにむしの聲などは聞えたり八日そかへらさせ給へは
七夕まつりなとにてれいよりはちかうみゆるはほとんせはければ
なめり

宰相の中將忠信のふかたの中將とまいる給へるに人

々いてて物なといふにつめてもなくあすはいかなる詩をかといふにいさ
さかおもひめぐらしとこほりもなく人間の四月をこそはといらへ給へる
いみしうおかしきこそすきたる事なれと心えていふはおかしき
なかにも女房なとこそさやうの物わすれはせねは男はさもあらずよみ
たる歌をたになまおほえなるを誠におかしうちなる人もとなる
人も心えずとおもひたるそことはりなるやこの三月つこもりほそ殿
の一のくちに殿上人あまたたてりしをやうやうすへりうせなとしてた頭中
將源中將六位ひとりのこりてよろつの事いひ經よみ歌うたひなとするに
あけはてぬなりかへりなんとて露はわかれの涙なるへしといふ事を頭中將
うちいたし給へれば源中將もるともにいとおかしうすんしたるにいそき
たる七夕かなといふをいみしうねたかりてあかつきの別のす
ちのふとおほえつるままにいひてわひしうもあるわさかなとすへてこのわた
りにてはかかる事おもひまはさすいふはくちおしきそかしなと
いひてあまりあかくなりし川

かつらきのかみいまそすちなきとてかけておはしにしを七夕のおり
此事をいひ出はやおもひしと宰相になり給ひしかはかならずしも
いかてかはそのほとに見せなとせん文かきてとのもつかさなにて
やらんなとおもひしほとに七日まいり給へりしかはうれしくて其夜
の事なといひいては心もそへ給するにふといひたらはあやしなとやう
ちかたふき給はんさらはそれにはありし事はんとてあるに露おほ
めかていらへ給へしかは誠にいみしうおかしかりき月ころいつしかと
おもひ侍したに我心なからすきすきとおほえしにいかてさはた思ひ
まうけたるやうにの給ひけんもろともねたかりいひし中將はおもひもよら
てゐたるにありしかかつきの事はいましめらるはしらぬかとの給ふにそ
けにけにとわらふわるしかし人もいふ事を誠になしてちかくかたら
ひなとしつるをはてゆるしてけるけさ■しつなといひおとこはてうけんなど
いふ事を人にはしらせす此君と心えていふを何事そ何事そと源中
將はそひつきてとへといはねはかの君に猶これの給へとうらみられ
てよき中なればきかせてけりいとあへなくいふほともなくちかうなりぬる
をはをしこうちのほとそなといふにわれもしりにけるといつしかしらせんと
てわさとよひ出てこはんへりやまるもうたんとおもふはいかか手は
ゆるし給はんや頭中將とひとしなりなおほしわきそといふにさのみ
あらはさためなくやといらへしをかの君にかたり聞えければうれしく
いひたるとよるこひ給ひなをすきたる事わすれぬ人はいとおかし宰相に
なり給ひしをうへの御前にて詩をいとおかしう誦侍りしを蕭會稽
之古廟をも過にしなともたれかいひ侍らんとするしはしならてもさぶらへ
かしくちおしきになと申ししかはいみしうわらはせ給ひてさなんいふとてな
さしかしなと仰られしもおかしされとなり給ひにしかは誠にさうさう
しかりしに源中將をとらすとおもひてゆへたちありくに宰相の中將の
御うへをいひ出ていまた卅のこにおよはずといふ詩をこと人には
似すおかしうすし給なといへはなとかそれにおとらんまさりてこそせ
めとてよむさらになるくもあらずといへは侘しの事やいかてあれ
かやうにすんせてなりしなとの給卅のこといふ所なんすへていみしうあ
れあひきやうつきたりしなといへはねたかりてわらひありくに陣につき給
りけるおりにわきてよひ出てかうなんいふ猶そこをしへ給へとい
ひければわらひてをしへけるもしらぬにつほねのもとにていみしくよく似
せてよむにあやしくてこはたそとへはゑみこゑになりていみしき事
きこえんかうかう昨日陣につきたりしにとひきてたちになるなめ
りたれそとにくからぬけしきにとひ給へれはといふわさとさならひ給け
んおかしければこれたにきけはいてて物なといふを宰相の中將のとく

みる事四方にむかひておかむへしなといふしもありなからうへに
なといはするにこれをうちつればありなといふおまへにかくな
と申せはわらはせ給内の御物忌にてなんうこんの上官みつなに
とかやいふものしてたたうかみにかきておこせたるを見れば参せんとする
をけふあすは御忌物にてなん卅のこにおよはすはいかかといひたれば返
事にそのこはすき給ひぬらんすそはいしかめをしけん年にはここにし
もかきてやりたりしを又ねたかりてうへの御前にもそつしければ宮の御
かたにわたらせ給ていかてかかる事はしりしそ四十九になりけるとしこそ
いましめけれとて宣方は侘しういはれにたりといふめるはとわらは
せ給ひしこそものくるをしかりける君かなとおほえしかこき殿とは
閑院の大政大臣の女御をそきゆるその御かたにうちふしといふもののむ
すめ左京といひてさふらひけるを源中將かたらひておもふなと人々わら
ふ比宮のしきにおはしまいにまいりて時々は御殿なとつかうま
つるへけれとさるへきさまに女房なともてなし給はねはいと宮つかへ
をろかにさふらふ殿お所をたにたまはりたらんいみしうまめにさふ
らひなんなといひぬ給つれば人々けになといふほとに誠に人はうち
ふしやすむ所のあるこそよけれさるあたりにはけしくまいり給なるもの
をとさしいらへたるとすへて物きこえずかた人とたのみきこゆれば人の
いひふるしたるさまにとりなし給ふなといみしうまめたちてうらみ給
あなあやしやかなる事をか聞えつるさらにききとめ給事なし
なといふかたはらなる人をひきゆるかせさるへき事もなきをほとをり出
給やうこそあらめとはなやかにわらふにこれもかのいはせ給ならんと
いと物しとおもへりさ
ものをといひてひきいりにしかはのちにも猶人にはちかましき
事いひつけたるとうらみて殿上人のわらふとていひ出たるなりとの給へ
はさてはひとりをうらみ給ふへくもあらさなるにあやしなといへとそ
ののちはたえてやみ給ひにけり
むかしおほえてふようなる物うけんはしのたたみのふりてふしいてきたる
からゑの屏風のおもてそこなはれたる藤のかりたる松の木
の枯たるちすりのものはなかへりたるゑし
のめくらき木丁のかたひらのふりぬるも
かうのなくなりぬる七尺のかつらのあかく
なりたるえひ染のおり物のはいかへりたる色このみのおひくつおれ
たるおもしるき家の木立やけたる池なとはさなからあれ
とつき草み草なとしけりて
たのもしけなき物心みしかくて人わすれかちなるむこのよかれかちな

る六位のかしらしろきそら

事する人のさすかに人の事なしかほに大事うけたる

一番にかつすくろく七八十なる

人の心ちあしうしてひころになりぬる風吹にほあけたる舟

と經は不斷經

ちかくてとをき物宮のへのまつりおもはぬはらからしんそくの中くらま
のつつらおりといふみちしはすのつこもりむつ月のついたちのほ
と

遠てちかき物こくらく舟の道男女の中

井はほりかねの井はしり井はあふ坂なるかおかしき山の井

さしもあさきためしになりはしめけんあすか井みも井もさむしとほめ

たるこそおかしけれ玉の井少將井櫻井きさいまちの井千女尺

井

受領は紀伊守和泉

やとりつかさのこんのかみは下野甲斐越後筑後阿波

大夫は式部大夫左衛門大夫吏大夫

六位藏人おもひかくへき事にもあらずかうふりえてなにの大夫權

守なといふ人のいたやせはき家もたりて

またくひかき

あたらしくし車やとりに車引たてまへちかく

こ木をおほして牛つなかせて草なとかはするこそいとにくけれ庭いと

きよけにてむらさきかはしていよすかけ渡してぬのさうしなとはり

てすまゐたるは門つよくさせなと事おこなひたるいみ

しうおいさきなく心つきなしおやの家しうなとはさらなりおちあになとの

すまぬ家そのさるへき人のなからむはをのつからむつましう打しりたる

受領又國へゆきていたつらなるさらすは女院宮は

らなどのやあまたあるにつかさ待いててのちいつしかとよき

所尋出てすみたるこそよけれ

女のひとりすむ家などはたいたうあはれてついちなともまたからす池

などのある所はみ草ぬ庭なともいとよもき

しけりなとこそせねともところところすなこの中よりあをき草み

えさひしけなるあはれなれ物かしこけにまたらにすりし

て門いたうかためきはきはしきはいとうたてこそおほゆれ

宮つかへ人のさとなともおやともふたりあるはよし人

しけくいていりおくのかたにあまたさまさまのこゑおほくきこえ馬

のをとしてさはかしきまであれとかなしされとしのひてもあ

らはれてもをのつらいて給ひけるをしらてとも又いつかまいり給
ともいひにさしのそく心かけたる人はいかかはと

あけなとたさはかしうあやうけに夜なかまてなきおもひた
るけしきいとにくし大御門はさしつやなとふなれはまた人のおは
すれはなとなまふせかしけにおもひてらふるに人いて

給ひなはとくさせこの比はぬす人いとおほかりなといひたる
いとむつかしう打きく人たにありこの人のともなるものとも

このかくいまや出るとたえさしのそきて氣色みる物とも
をわらふへかめりまねうちすまもききてはいかにいとさひしう
いひとかめんいと色に出ていはぬも

おもふ心なき人はかならずきなとやするされとすくよかな
るかたは夜ふけぬ御門もあやうかなりと

あまたたひやはるれは

猶あかせは度々ありくにあけぬへきけしきをめつらかにおもひ

ていみしき御門をこよひらいさうとあけひろけてと聞えこちてあちき
なくあかつきにそさすなるいかにきおやそひぬるは猶さうあるまし

てまことならぬはいかに思ふらんとさへつつましうてせうとの家なと
けにきくにはさそあらん夜なかあかつきともなく門いと心かしこくも
くなにの宮うちわたり殿はらなる人々のいてあひしてかうし

なともあけなから冬の夜とあかして人の出ぬるのちも見出したるこ
そおかしけれあり明なとはましていとおかしふえなとぶきていてぬるに
我はいそきてもねられす人のうへなともいひ歌なとかたりき

くままにねいりぬるこそおかしけれ

雪のいとたかくはあらてうすらかにふりたるなとはいとこそおかしけれ
又雪のいとたかくふりつみたる夕暮より

はしちかうおなし心なる人二三人はかり火おけ中にすへて物
かたりなとするほとにくらうなりぬれはこなたには火もともさぬ

に大かた雪の光いとしろう見え

たるにひはししてはいなとかきすさひてあはれなるもおかしきもいひあは
すこそおかしけれよひもすきぬらんとおもふほとに

くつのをとのちかうきこゆれはあやしと見たしたるに
時々かやうのおりおほえ

なくみゆる人なりけりけふの雪をいかにとおもひきこえなからなんて
うことにさはりそのところにくらしつるよしなといふけふこん人をなとや
うのすちをそいふらんかしひるよりありつる事ともをうちはしめてよ
ろつこのことをいひわらひわらうたさしいてられと

かたつかたのあしはしもなからあるに

かねのをとのきこゆるま

てなりぬれとうちにもといふ事ともはあか

すそおほゆるあけくれのほとにかへるとて雪のなにの山にみてりとう

ちすんしたるはいとおかしき物なり女のかきりしてさもえあ

ささらましをたたなるよりはいとおかしうすきたるありさまなどをいひあは
せたり

村上の御時雪のいとたかうふりたるをやうきにもらせ

給ひて梅の花をさして月いとあかきに

兵衛の藏人にたひたりければ月雪花ときとそうしたりけるこ

そいみしうめてさせ給ひけれ歌なとよまんはよのつねなりかうおりにあひ
たる事なんいひかたきとこそ仰られけれおなし人を御ともにて殿上に人

さふらはさりける程たすませおはしますにすひつのけふりのたちければ
かれはなにのけふりそと見てこと仰られければ見てかへりまいりて

わたつみのおきにこかるる物みればあまのつりしてかへる成けり

とそうしけるこそおかしけれかへるのとひいりてこかるる成けり

みあれのせんしの五寸はかりなる殿上わらはのいとおかしけなるを

つくりてみつらゆひさうそくなとつるはしくして名かきて奉

せたりけるにともあきらのおほきみとかきたりけるをこそいみしうけう

せさせ給ひけれ

宮にはしめてまいりたる比物のはつかしき事かすしら

す涙もおちぬへければよるまいりて三尺の御木丁のうしろにさふら

ふにゑなとり出て見せさせ給ふたにてもさしいつましうわ

りなしこれはとありかれはかかりなとの給はするにたかつき

にまいりたる御とのあふらなわはかみのすちなとも中々ひるよりはけせ

うにみえてまはゆけれと念してみなとすいとつめたき比なれはさし出

させ給へる御てのはつかにみゆるかいみしうにほひたるうすこうはいなるは

かきりなくめてたしと見しらぬさとひ心ちにはいかかはかかるとこそ

よにおはしましけれとおとろかるるまでそまもりまいらするあかつきにはと

くなといそかるるかつら木の神もしはしなと仰らるるをいかて

すちかひても御覽せんとてふしたれは御かうしもまいらす女官

まいりてこれはなたせ給へといふを女房ききてはなつをま

なと仰らるれはわらひてかへりぬ物なとはせ給ひの給はするに

ひさしうなりぬれはおりなまほしうなりぬらんさははやとてよさりは

とくと仰らるるぬさりがくるるやをそぎとあけちらしたるに

雪いとおかしけふはひる

つかたまいれ雪にくもりてあらはにもあるましなとたひたひめせ
はこのつほねあるしもさのみやこもりぬ給らんとするいとあ
へなきまで御前ゆるされたるはさおほしめすやうこそあらめおもふにた
かふはにくき物そなとたたいそかしいたせはわれにもあらぬ心ち
すれとまいるもいとそくるしき火たきやのうへにふりつみたるもめつらしう
おかしう御まへちかくはれいのすひつの火こちたくおこしてそれにはわさと
人もぬす宮はちんの御火おけなしゑしたるにむかひておはします上郎
御まかなひし給けるままにちかくさぶらふ

つきのまになかすひつにまなくぬたる人々か

らきぬきたれたるほとなれやすらかなるをみるもうらやましく御
ふとりつきたちぬふるまふさまなとつつましけならず物いひえわら
ふいつのよにかさやうにましらひならんと思ふさへそつつましきあふより
て三四人つとひて繪なと見るもありしはしありてさきたかふをと
すれは殿まいらせ給なりとてちりたる物ともとりやりなとするに
おくにひきいりて

さすかにゆかしきなめりと御木丁のほころひよりはつかに見いれたり
大納言殿のまいらせ給なりけり御なをしさしぬきのむらさきの色
雪にはへておかしはしらのもとにぬ給て昨日けふ物いみにて
侍れと雪のいたくふりて侍れはおほつかなさになとの給みちも
なしと思ひつるにいかてかとそ御いらへあなるうちわらひ給て哀とも
や御覽するとなとの給御ありさまはこれよりは何事か

まさらん物語にいみしうくちにまかせていひたる事ともおとら
さめるをおほゆ宮はしろき御そとも紅のからあやふたつ

しろきからあやと奉りたる御くしのかからせ給へるなとゑにかきた
るをこそはかかる事はみるにうつつにはまたしらぬを夢の心ちそする
女房と物いひたはふれなとし給をいらへいささかはつかしとも
おもひたらすきこえかへしそら事などの給かかるをあらかひ返しなと
きこゆるはめもあやにあさましきにてあいなくおもてそあかむや御くた物
まいりなとして御前にもまいらせ給御木丁のうしろよりなるはた
れそととひ給なるへしさそと申にこそはあらめたちておはするをほかへ

にやあらんと思ふにいとちかうぬ給て物などの給またまいらさ
りし時間なき給ひける事なと誠にさやありしなどの給に御木丁
へたててよそにみやり奉るたにはつかしかりつるをいとあさ
ましうさしむかへ聞えたる心ちうつつともおほえす行幸なとみるに
車のかたにいささか見おこせ給は下すたれひきつくろひす

きかけもやとあふきをさしかくす猶いと我なからもおほけなくいかて

たち出しそとあせあへていみしきになに事をかいらへもきこえん
かしこきかけとささけたる扇をさへとり給へるにふりかくへきかみの
あやしささへ思ふにすへて誠にさる氣色やつれてこそ
見ゆらめとくたち給へとおもへと扇をてまさくりにして糸はたか
かかせたるそなどの給てとみにもたち給はねは袖をしあて
てうつふしうつふしたるもからきぬにしるい物うつりてまたくらんかしひ
さしうゐ給たりつるをろむなうくるしと思ふらんと心えさせ給へる
にやこれ見給へこれはたかかきたるそときこえさせ給ふをうれしと思ふに給
はりて見侍らんと申給へは猶ここのとの給はすれは人をとらへて
たて侍らぬなりとの給いといまめかしう身のほとしにはあはすかた
はらいたし人のさうかなこりとかきたる草子とり出て御覽すたれ
かにかあらんかれに見せさせ給へそれそ世にある人のては見しりて侍
らんとあやしき事ともをたたいらへさせんとの給ふ
ひと所にあるに又さきうちをさせておなしなをしの人まいらせ給ひ
てこれはいますこしはなやきさるかう事なとうちしほめわらひけうし
我もなにかしかとある事かかることなと殿上人のうへなと申をけはな
をいと變化の物天人などのおりきたるにやなとおほえてしをさふらひな
れ日比すくれはいとさしもなきわさにこそありけれかく見る人々も
家のうちいてそめけんほとはさこそおほえけめとかくしてもて行
にをのつからおもなれぬへし物なと仰られて我をは思ふやとと
はせ給御いらへにいかにかはとけいするにあはせて又はん所のかたにはな
をいとたかくひたれはあな心うそら事するなりけりよしよしとて
いらせ給ひぬいかてか空事にはあらんよろしうたにおもひ聞えさ
すへき事かははなこそは空事しけれとおほゆさてもたれ
かくにくきわさしつらんと大方心つきなしとおほゆれはわかさる
おりもをしひしき返してあるをましてにくしと思へとまたふ
うゐつゐしければともかくもえけいしなをさてあけぬれはおりたる則
あさみとりのうすやうにえんなる文をもてきたりみれは
いかにしていかにしらましいつはりを空にたたすの神なかりせは
となん御氣色いとあるにめてたくもくちおしうもおもひみたるるに猶
よへの人そたつねもきかまほしき
うすさこさそれにもよらぬ花ゆへにうき身のほとをしるそ佗しき
なをこれはかりはけいしなをさせ給へしきのかみもをのつからいとかしこ
しとてまいらせて後もうたておりしもなとてさはたありけんいとなけ
かし
しりかほなる物正月一日のつとめてさいそにはなひたる人

きしろふたひの藏人になしう子なしたる人の
けしき

除目にその年の一の國えたる人のよる

こひなといひていかしこうなり給へりなと人のいふいらへになにかいと
ことやうにほろひて待なれはなといふもしたりかほなりいふ人お
ほくいとみたる中にえられてむこにとられたるも我はとおもひぬへしこ
はき物のけてうしたるけんしやぬふたきの明とうしたる小弓いるにかたつ
方の人しはふきをしまきはしてさはくに念して音たか

ういてあてたるこそしたりかほなるけしきなれこをうつにさはかりとしら
てふくつけさはまたこと所にかかりありくにことかたよりめもなくしてお
ほくひろひとりたるもうれしからしやほこりかにうちわらひたたのかち
よりはほこりかなりありてすりやうになりたる人のけしきこそうれしけ
なれわつかにあるすんさもなめけにあなつりつるもねたしといかかせんとて
念し過しつるに我にもまさる物とものかしこまりた仰うけ給はらんとつい
しうするさまはありし人とやほみえたる女かたにはいなる女房うちつかひ
みえさりしてうとさうそくのわき出るすりやうしたる人の中將になりたる
こそもときんたちのなりあかりたるもけたかうしたり
かほにいみしうおもひためれ

くらぬこそなをめてたき物にはあれおなし人ながら大夫の君や侍従の君
なときこゆるおりはいとあなつりやすき物を中納言大納言大臣などに

なりぬれはむけにせんかたなくやんことなくおほえ給事のこよな

さよほとほとに付てはすりやうもさこそあめれあまた

國に行て大貳や四位などになりぬれは上達部
になり

ぬれはおもおもしされとさりとてほとすきなにはかりの事

かはある又おほくやはあるすりやうの北方にて

くたるこそよろしき人のさいはいにはおもひてあめれ

たた人の上達部のむすめにて后にな

り給こそめてたけれされと猶男は我身のなり出

そめてたくうちあふきたるけしきよ法師などのなにかし供奉なとい
ひてありくなとは何事かはみゆる經たうとくよみめきよけなる

につけても女にあなつられてなりかかりこそすれ僧都僧正になりぬ

れは佛のあらはれ給へるにこそおほしまとひてかしこまるさまは

何にかはにたる

風は嵐木枯三月はかりの夕暮にゆるく吹たる花風いと

あはれなり八月はかりに雨にましりて吹たる風いとあはれな

り雨のあしよこさまにさはかしう吹たるに夏とをしたるわたきぬのあせ
のかなとせしかかはきすすしのひとへに引かさねてきたるもお
かしこのすすしたにいとあつかはしうすてまほしかりしかは
いつのまにかうなりぬらんと思ふもおかし曉かうしつまとなと
ををしあげたるに嵐のさと吹わたりてかほにしみたるこそいみしうお
かしけれ

九月つこもり十月ついたちのほとん空うちくもりたるに
風のいたう吹にきなる木のはなともほろほるとこほ
れおつるいとあはれなり櫻のはむくの葉な

とこそおつれ十月はかりに木たちおほかる所の庭
はいとめてたし

野分の又の曰こそいみしうあはれにおほゆれ
たてしとみ

すいかいなとのふしなみたるにせんさいとも心くるし
けなるをおほきなる木ともたふれ枝ぶきおられたる事たにをしきに
をみなへしなと

うへによるほひはいふせすいとおもはずなり
かうしのつほなとにさ

ときはをことさらにしたらんやうにこまこまとぶきいれたる
こそあらかりつる風のしわざともおほえねいとときぬのうへはくもりたる
をきてくち葉のおり物うす物なこのうちききてまことしく

きよけなる人の夜は風のさはきにねさやつれはひさしうねおきたるま
まに鏡うちみてもやうち過しぬさりいてたるかかみは風

に吹まよはされてすこしうちぶくみたるかたにかかりたるほと誠
にめてたし物あはれなるけしき

みるほとに十七八はかりにやあらんちい

さうはあらねとわざとおとななとはみえぬかすすしのひとへのい
みしうほころひたる花もかへりぬれなとしたるうす色のとのぬ
物をきてかみはお花のやうなるそきす

へしてたけはかりはきぬのすそにはつれてはかまのみあさやかにて
そはより見ゆるわらはへのわかき人のねこめに吹おられ
たるせんさいなとをとりあつめおとしたてなとするをうら山

しけにをしはりて
つきそひたるうしろもおかし

心にくき物物へたてて聞に女房とはおほえぬ手のしのひやかに
きこえたるにこたへわかやかにしてうちそよめきてまいるけはひを

ものまいりほとにやはしかいなと

のとりませてなりたるひさけのえのたうれふすもみみこそとまれ

うちたるきぬのあさやかなるにさつかしうはあらてかみのふりやられたる

いみしうしつらひたる所の御とのあふらはまいてな

かすひつにいとおほくおこしたる

火によくかきたるゑのみえたる

おかしはしのいときはやかにすちかひたるもおかし夜い

たうふけて人のみなねゐる後にとのかたにて

殿上人など物いふにおくに暮いしけにいるるをとのあまた

きこえたるいと心にくし

すのこに火ともしたる物へたててきくに人のしのふるか

夜中なとうちおとろきていふ事はきこえず男もしのひやかにうち

わらひたるこそなに事ならむとおかしけれ

島はうき島やそ島たはれ島みつ島松かうら島ま

かきの島とよらの島なと島

はまもそとはま吹上の濱長濱うちてのはまもみ

よせの濱千里の濱ひろうおもひやらるれ

浦はおふのうらしほかまのうらしかの浦名たかのうらこり

すまのうら和歌の浦

寺はつほさかかさきほうりん高野は弘法大師の御栖かなる

か哀なるなり石山こ川志賀

經は法花經さらなり千手經普賢十願

隨求經

尊勝陀羅尼阿彌陀の大咒千手陀羅尼

文は文集文選はかせの申文

佛は女意輪は人の心をおほしわつらひてつらつえつきておはするよにし

らすあはれにはつかし千手すへて六観音不動尊藥師佛尺迦

彌勒普賢地藏文殊

物語は住吉うつほのるいとのおつり

月待女かたのの少將梅つほの少將くにゆつ

り埋木道心すすむる松か枝こまのの物語はふるきかはほりさ

し出てもいにしかおかしきなり

野はさかのさなりいなひ野かた野こま野あはつ野とふひ野

しめし野そうけ野こそするにおかしけれなと

さつけたるにかあらんあへ野宮城野春日野紫野

陀羅尼はあかつきと經は夕くれ

あそひわさはよる人のかほみえぬほと

あそひわさはさまあしけれともまりおかしこゆみぬふ

たきこ女はへんいとおかし

まひは駿河まいもとめこたいへいらくはさまあしけれといとお

かし太刀なとうたてあれといとおもしろしもろこしにかたきにくして

あそひけんときくにとりのまひはとうは頭かみふりかけたるまみなとお

そろしけれとかくもいとおそろしらくそんの二人してひ

さふみてまひたる

こまかた

引物は琵琶しらへはふかうてうわうしきてうそかうのきう

鶯のさえつりといふしらへもさうのこといとめてたし

しらへは想夫戀

笛はよこふえいみしうおかしとをうよりきこゆるかちかうな

りもて行もいとおかしちかかりつるこゑはるかにきこえてことほのかなる

もいとおかし車にてもかちにて馬にても

見えすさはかりおかしき物はなしま

して聞しりたるてうしなといみしうめてたしあかつきかたにわ

すれて枕のもとにありけるを見付たるも猶おかし人のも

とよりとりにおこせたるをおしつつみてやるもたた文のやうにて見えたり

さうの笛は月のあかきに車などにてきこえたるいみしうおかし所せく

てあつかひにくくそ見ゆる吹かほやいかにそそれはよこ笛も

ふきなしありかしひちりきはいとむつかしう秋の虫をいははくつは

むしなにてうたてけちかくきかまほしからすましてわろうふきたる

はいとにくきにりんしのまつりの日いまた御前には出はててものうし

るにてよこ笛をいみしう吹たてたるあなおもしろとききまとふほとにな

からはかりよりうちつけてふきのほせたる程こそたたいみしううるはしき

かみもたらん人もみなたちあかりぬへき心ちそするやうやうこと笛あは

せてあゆみ出たるいみしうおかし

見る物は行幸まつりのかへさ御賀茂詣臨時の

まつり空くもりてさむけなるに雪すこし打ちりてかさしのはなあを

すりなとにかかりたるえもいはすおかしたちのさやのきはやかにくろうまた

たきてしろくひろうみえたるにはんひのをのかかりたる

はかまの中よりこほりかとおとろくはかりなるうちめなとすへて

めてたしいますこしわたらせまほしきにつかひはかならず

にくけなるもあるたひはめもとまら

ぬされと藤の花にかくされたるほとはおかし猶

いますきぬるかたみをくらるるにへいしうのしなをくれたる柳にか
さしの山吹おもなくみゆれともあふひいとたかくうちて賀茂

の社の夕たすきとつたひたるはいとおかし

行幸になすらふる物なにかあらん御こしにたてまつりたるを見まいら

せたるはあけくれ御前にさふらひつかうまつる事もおほえす神神し

ういつくしうつねはなにもなきつかさひめまうち君

さへそやんことなふめつらしうおほゆるみつなのすけの中少將なといとお
かし

まつりのかへさいみしうおかし昨日はよるつの事うるはしうて一條のおほ

ちのひろうきよらなるにひの影もあつく車にさしいりたるもまはゆけ

れはあぶきしてかくしるなをりなとしてひさしう待つるもみく

るしうあせなともあらしをけふはいとくいてて雲林院知足院など

のもとにたてる車ともあふひかつらもうちなへてみゆるはい

てわたれと空はなをうちくもりたるにいかてきかんとめをさま

しおきぬてまたるほとときすのあまたさへあるにやときこゆるまでなきひ

ひかせはいみしうめてたしと思ふほとに驚のおひたる聲にてか

れににせんとおほしくうちそへたるこそにくけれと又おかしければいつ

しかとまつに御社の方よりあかききぬともきたる物ともなど

つれたちてくるをいかにそ事なるやなといへはまたこんなどいらへ

て御こしたこしなともてかへるこれにたてまつりておはしますらんもめてた

くけちかくいかてさるけすなどのさふらふにかとおそろしくはるか

けにいふほともなくかへらせ給あぶきよりはしめてあをくち葉ともの

いとおかしくみゆるに所衆のあを色しらかさねをけしきはかりひき

かけたるは卯の花かさねちかうおほえて郭公もかけにかくれぬへ

うおほゆかし昨日は車ひとつにあまたのりてふたあひのなをし

あるはかりきぬなとみたれきてすたれとりおろしものくるおしきまでみ

えし君たちの齋院のえんかにとてひのさうそくうるはしくてけふはひと

へつつおさおさしくのりたるしりに殿上わらはのせたる物も

おかしわたりはてぬるのちにはなとかさしもまとふらんわれもわれもとあやう

くおそろしきまでさきにたたんといそくをかうないそきそのとやかにやれと

あぶきをさし出てせいすれとききもいれねはわりなくてすこしひろき所に

しぬてとめさせてたてたるを心もとなくしとそおもひたる

きおひかくる車ともをみやりてあるこそおかしけれすこしよろしき

ほとにやりすこして道の山さとめあはれなるにうつきかきねといふ物

のいとあらあらしうおとろかしけにさし出たる枝ともなとおほかるに

花はまたよくもひらけはてすつほみたるかちにみゆるをおらせて車の

こなたかなたなとにさしたるもかつらなどのしほみたるかくちおしきにおか
しうおほゆるゆくさきをちかうゆきも

て行はさしもあらさりつるこそおかしけれ男の車のたれともしら
ぬかしりにひきつつきてくるもたたなるよりはおかしとみゆるにひきわかる
る所にてみねにわかるるといひたるもおかし

五月はかり山里にありくいみしくおかし澤水もけに

たたいとあをくみえ渡るにうへはつれなくて草をひしけりたるを

なかなかたたさまに行はしたはえならさりける水のふかうはあらねと人

のあゆむにつけてとはしりあけたるいとおかし左右にある

かきに枝などにかかりて車のやかたにいるをいそ

きてとらへておらんとおもふにふとはつれて過ぬるもくち

おしよもきの車におしひしかれたるかわのまひたりたるに

ちかうかけたるもかのかかくたるもいとおかし

いみしうあつき比夕すすみなどいふほと物のさまなと物おほめかし

きに男車のさきおふはいふへき事にもあらずたの人もしりのすた

れあけてふたりもひとりものりてはしらせていくこそいとすすしけなれまし

て琵琶ひきならし笛の音きこゆるは過ていぬるも口おしく

さやうなるほとにうしのしりかひもしらぬにやあらんかのあやしうかき

しらぬさまなれとおかしきこそものくるおしけれいと

くらふやみなるにさきにともしたる松のけふりのかの車にかか

りたるもいとおかし

五日のさそふの秋冬すくるまであるかいみしうしろみかれてあやしきを引
おりあけたるそのおりのかのこりてかかへたるもいみし

うおかし

よくたきしめたるたき物の昨日おととひけふなとはうち過たるにきぬ

をひきかつきたる中にけふりののこりたるはたたいまのより

もめてたし

月のいとあかき夜川をわたれはうしのあゆむままにすいしやうなどのわれ
たるやうに水のちりたるこそおかしけれ

おほきにてよきもの法師くた物家系ふくろすすり

すみおのこの目あまりほそきは女めきたり又かなまりのやうならんはお

そろし火おけほつつき山吹の花ひら馬も

牛もよきはおほきにこそあめれ

みしかくてありぬへき物とみの物ぬふいととうたいけす女のかみうるはし

くてみしかくて有ぬへし人のむすめのこゑ

人の家につきつきしき物

くりや侍のさうし

ははきのあたらしきかけはん童女はした物中のはむついたて
さうし三尺の木丁さうそくよくしたる糸袋から笠かきいたたなつし
わらうたひちおりたるらうちくわう氣かきたる火おけ

物へ行みちにきよけなるおのこのたて文のほそやかなるもち
ていそきて行こそいつちならんとおほゆれ又きよ

けなるわらはなとのあこめとものいとあさやかにはあらずなへは
みたるけいしつややかなるかかはにつちおほく

ついたるをはきてしるきかみにつつみたるものもしははこ

のふたに草子ともなと入てもて行こそいみしうよひよせて見まほしけ
れ門ちかなる所のまへを渡るをよひいるるにあいきやう

なくいらへもせていくものはつかうらんこそおしはからる
れ

行幸はめてたきもの上達部きんたちの車などのなきそすこしさうさうしき

よろつの事よりもわひしけなる車にさうしきわろくて物見る人い

ともとかし説經なとはいとよしつみうしのかたの

事なればそれたに猶あなかななるさまにて見くるしかるへきをまして
まつりなとは見てありぬへし下す

たれもなくしてしるきひとへうちあけなとしてあめりかしたた

その日のれうにとて車をしたすたれもしたていとくちおし

うはあらしといてたちたるにまさる車なとみつけてはなにし

になとおほゆる物をましていかはかりなる心ちにてさてみるら

んおりのほりありくきんたちの車のおしわけてちかうた

つときなとこそ心ときめきはすれよき所にたてんといそかせはとくい

てて待ほといと久しきにぬはりたちあかりなとあつく

くるしく待こうするほどに齋院のえんかにまいりたる殿上人

所の衆辨少納言なと七重八重引つつけて院のか

たよりはしらせてくるにそ事なりにけりとおとろかれてうれし

けれ殿上人の物いひおこせ

所々の御前ともにすいくわんくわせてさしきのもとに馬ひ

きよするにおほえある人の子とせなとはさうしきなとはをりて馬

のくちなととおかしさらぬ物の見もいれられぬなとそいとおしけ

なる御こしわたらせ給へはすたれをあるかきりとりおろし

すきさせ給ひぬるにまとひありくもおかしそのまへに

たてる車はいみしうせいするになとてたつましきそとしの

ひてたつれはいとわつらひてせうそこなとすこそおかし

けれ所もなくたちかさなりたるに昨日のところの御車
人たまひきつつきておほく来るをいつくにたたんと
みるほとに御前ともたたおりにおりて

たてる車とも

をたたのけにのけさせて人たまひつつきてたてたるこそいと
めてたけれ

をひのせられたる糸せ車と■

牛かけて所あるかたへゆるかしもて行なと

いと佗しきなりきららしきなとはえさしもおしひしかすかし

い

ときよけなれとまたひなひあやくけすもたえすよひよせ

ちこいたしすへなとするもあるそかし

ほそ殿にひんなき人なん曉にかささせていてけるをいひいてたるを

よくきけは我うへなりけり地下なといひてもめやすく人にゆるされぬはか

りの人にもあらさなるをあやしの事やおもふほとにうへより御文もて

きて返事たたいまと仰られたりなに事にかとおもひてみれば大かさ

のかたをかきて人はみえす手のかきりかさをとらへさせてしにも

みかさ山やまのはあけし朝より

とかかせ給へりなをはかなき事にもめてたくのみおほえさせ給には

つかしく心つきなき事はいかてか御覽せられしと思ふにさる空事

などのいてくるはくるしければおかしうてことかみに雨をいみしうぶらせ

てしにも

雨ならぬ名のふりにける哉

さてはぬれきぬには侍らんとけいしたれは右近の内侍などにかたらせ給

てわらはせ給けり

四條宮におはします比五日のさうぶのこしなともちてまいりくす玉まい

らせなとわかき人々みくしけ殿なとくす玉して姫宮わか宮つけさ

せ奉りいとおかしきくす玉ほかよりもまいらせたるにあをさ

しといふ物を人のもてきたるとあをきうすやうをえんなるすすりのふたにし

きてこれませこしにさぶらへはとてまいらせたれは

みな人の花やてうやといそく日も我心をは君そしりける

とかみのはしをやりてかかせ給へるもいとめてたし

十月十餘日の月いとあかきにあるきて物見むとて女房十五六人はかりみ

なこききぬをうへにひきかへしつありし中に中納言の君の紅の

はりたるをきてくひよしかみをかひこし給へりしかはあたらしきそとは

よくもに給ひしかなゆけいのすけとそわかき人々にはつけたりししりに

たちてわらふもしらすかし

大藏卿はかりみみとき人はなし誠にまつけのおつるほともきき

つへくそありししきの御さうしのしおもてにころ大殿

の四位の少將とて物いふにうちある人この少將に扇の繪

の事いへとささめけはいまかの君たち給なんにをとみそかにいひい

るをその人たにえききつけてなになにとみみをかたふくるに手を

打てにくしさの給ははけふはたたしとの給こそいかて聞給ひつら

んとあさましかりしか

すすりきたなけにちりはみすみのかたつかたにしとけなくすりひらめかし

らうおふきになりたるかささしなとしたるこそ心もとな

しとおほゆれよるつのでうとはさる物にて女はかかみすすりこそ

心のほとみゆるなめれをきくちのはさめにちりゐなとうちすてた

るさまにこよなしかし男はまして文つくゑにきよけにをしのこひて

かさねならずはふたつのかけこのすすりのいとつきつきしうまきゑ

のさまもわさとならねとおかしうて墨筆のさまも

人のめとむはかりしたてたるこそおかしけれとあれとか

かれとおなし事とてくる箱のふたもかたしおちたるすすり

わつかにすみのすられたるかたはかりくろうてそのほかはかはらの

めにしたかひていりゐたるちりのこの世にははらひかたけなるに

水打なかしてあをしのかめのかちをちてくひのかきり

あなのほとみえて人わるきなともつれなく人のまへに

さしいつかし

人のすすりを

ひきよせて手ならひをも文をもかくにその筆なつかひ

給そといはれたらんこそいとわひしかるへけれうちをかむも人わろし

猶つかふもあやにくなりさおほゆる事もしりたれば人のするも

いはて見るになとよくもあらぬ人のさすかに物かかまほし

うするかいとよくつかひかためたる筆をあやしのやうに水か

ちにさしぬらしてこは物ややりとかなにそほそひつのふたなと

にかきちらしてよこ様になけをきたれば水にかしらはさし入てふせ

るもにくき事そかしされとさいはんやは人のまへにゐたるにあなくらあ

ふより給へといひたるこそ又わひしけれさしのそきたるをみつけてはおとろ

きいはれたるもおもふ人のことにはあらずかし

めつらしといふへき事にはあらねと文こそ猶めてたき

物にははるかなるせかいにある人のいみしくお

ほつかなくいかならんとおもふに文をみればたたいまさしむかひたる

やうにおほゆるいみしき事なりかし我思ふ事をかきやりつればあ
しこまても行つかさるらめと心ゆく心ちこそすれ文といふ事な
からましかはいかにいふせく口ふたかる心ちせましよるつの事
おもひてその人のもとへこまこまとかきてをきつればお
ほつかなさをもなくさむ心ちするにまして返事みつれば
いの

ちをのふへかめるけにことほりにや

河はあすか川ふち瀬さためなくはかなからんといと哀なり

みみと川又何事をさしもさかしかり

けんとおかしをとなし河おもはずなるなとおかしきなめり大井川泉河みな

せ川なのりそ川なとり川もいかなる名をとりたるにかきかまほしほそ谷川な
なせ川玉ほし河天野川此しにもあなり七夕つめに宿からんと

なりひら讀けんましておかし

むまやはなしはらひくれのむまやつきのむまや

のくちのむまや山のむまやあはれなる事を聞きたりしに又

あはれなる事のありしかは猶とりあつめてあはれなり

岡は船岡ともおかはささのおひたるかおかしき事也かたら

ひのをか人見の岡

社はふるのやしる龍田のやしるはなふちの社

みくりのやしるすきのみやしるしあらんとおかしこと

のよしの明神いとたのもしとのみききけんともいはれ給へと思ふ

そいとおかしきありとほしの明神や

ませ給へとて歌よみて奉げんにやめ給ひけんいとおかしこの

ありとほしと名付たる心は誠にやあらんむかしおはしましける御門

のたたわかき人をのみおほしめして四十になりぬるをはうしなはせ給ひけ
れは人の國のとをきにいきかくれなとしてさらに都のうちになさる物

なかりけるに中將なりける人のいみしき時の人にて心なともかしこかり

けるか七十ちかき親ふたりをもちたりけるか四十をたにせいある

にましていとおそろしとおちさはくをいみしうけうある人にて遠き所には

さらにすませし一日に一度みてはえあるましとてみそかによるよる

つちをほりて屋をつくりてそれにこめすへていきつつみ

るおほやけにも人にもうせかくれたるよしをしらせてなとてか

家にいりあたらん人をはしらてもおはせしうたてありけるよにこそ

おやは上達部などにやありけん中將なと子にてもたりけ

んはいと心かしこくよろつの事しりたりければこの中將わかかれと

さえありいたりかしこくて時の人におほすなりけりもろこしの御

門此國のみかとをいかてはかりて此國打とらんとてつねに心み
あらかひをしてをくり給けるにつやつやとまるにうつくしく
けつりたる木の二尺はかりあるをこれかもとすゑいつかたとそとひ奉
りたるにすへてするへきやうなれば御門おほしめしわつらひたるにい
とをしくておやのもとに行てかうかうの事なんあるといへはたはやから
ん川にたちなからなけ入て見んにかへりてなかれんかたをす
ゑとるしてつかはせてをしふまいりてわかしりかほにして心み侍らん
とて人々くしてなけいれたるにさきにして行にしるしを付てつか
はしたれば誠にさなりけり五尺はかりなるくちなはのたたおなしやう
なるをいつれか男女とて奉りたり又さらにえし
らすれいの中將いきてとへはふたつならへてをのかたにほそきすはえを
さしよせんにははたらかさんを女としれといひければやかてそれはい
りのうちにてさしければことに一はうこかす一はうこかしけるに
又するしつてつかはしけりほとひさしうて七わたにたたなはり
たる中はとをりて左右にくちあきたるかさいさきを奉りてこ
れにつなとをして給はらん此國にみなし侍る事なりとて奉りたる
にいみしからん物の上すふようならむそこらの上達部よりはし
めてありとある人いふにまたいきてかくなんといへは大なるありを
ふたつとらへてこしにほそきいとをつけん又それかいます
こしふときをつけてあなたのくちにみつをぬりて見よといひければさ申てあ
りをいれたりけるにみつのかをかきて誠にいととうあなのあなたのくち
に出にけりさてそのいとものつらぬかれける後にたるをつかはしたりける
のちになん日本はかしこかりけりとて後々さる事もせさ
りける此中將をいみしき人におほしめしてなに事をしていかなる
くらぬをか給はるへきと仰られければさらにつかさくらぬもたまは
らしたた老たるちちははのかくうせて侍をたつねて都にすまする事を
ゆるさせ給へと申ければいみしうやすき事とてゆるされにければよろつ
のおやいきてよろこぶ事いみしかりけり中將は大臣に
なさせ給ひてなむありけるさてその人の神になりたるにやあらんこの明神の
もとへ詣てたりける人によりあらはれての給ける
七わたにわかれる玉のおをぬきてありとをしともしらすや有らん
との給ひけると人のかたりし
ふるものは雪にくけれとみそれのふるにあられ雪
のましろにてましりたるおかし
ひはたふきいとめてたし少きえかたになるほと
おほくはふらぬかかはらのめことにいりてくろうまろに見えたるいとあ

かし時雨あらはいたや霜もいたや

日はいりはてぬる山きはに光のなをとまりあかうみゆるにう

すきはみたる雲のたな引たるいとあはれなり

月は有明東の山のはにほそつていつるほとあはれなり

星はすはるひこほしみやう星夕つつよはひほしをたにな

からましかは

雲はしらきむらさきくるき雲あはれなり風吹おりのあま雲

さはかしき物はしり火いたやのうへにてたつるからす時のさはく火十八

日に清水にこもりあひたるくらうなりてまた火ともさぬほとにほかほか

より人のきあつまりたるましてとをき所人の國より家のしう

のほりたるいとさはかしちかきほと

に火いてきぬといふされともえつかさりける物見はてて車のかへりさは

くほと

ないかしろなる物女官ともかみあけたるさまかう糸のかはのおひのうら

ひしりのふるまひ

ことはなめけなるもの宮のめのさいもんよむ人舟こく物ともかなりのち

んの舍人

さかしき物いまやうのみとせにちこのいはらなととる女とも物

のくこひいてていのりの物共つくるにかみあまたおしかさねて

いとにぶきかたなしてきるさまひとへにたつへくもみえぬにさる物の

くとなりにければをのかくちをさへひきゆかめてをしきりめおほかりも

のともしてかけたけうちきりなとらにかうかうしうしたててうち

ふるひのる事ともいとさかしかつはなにの宮のそのとのわか君の

いみしうおはせしをかいのこひたるやうにやめたてまつりたりしかはろく

おほく給はりし事その人々めしたりけれとしるしもなかりければいまに

女をなんめす御とくをみる事なとかたるもおかしけすの

家の女あるししれたる物それおかしまことにさかしき人をかし

なとすへし

上達部は春宮大夫左右大將權大納言宰相中將

三位中將春宮權大夫侍從宰相

君達者頭辨頭中將權中將

四位少將藏人辨藏人少納言春宮亮藏人兵衛佐

法師は

律師内供

女は

内侍のすけないし

宮つかへ所は内后宮その御腹の姫宮一品の宮

齋院はつみふかけれとおかしましてこの比

はめてたし春宮の御はは女御

にくきものめのとの男こそあれ女はされともちかくよらねはよしおのこころ
はたた我ものにしてたちそひりやうしてうしろみいささかもこの御事にたか
ふ物をはさんし人をひともおもひたえすあやしけれとこれかとかを心にま
かせていふ人もなければ所えいみしきおももちしてことをおこなひなとする
によ

一條院をはいま内裏とそいふおはします殿を清涼殿にてその北なる殿
には東のわた殿にてわたらせ給ふみち

にて御前はつほなれはせんさいなとうへませゆいていとおかし二月十餘日
の日うらうらとのとかにてわたるにそのわた殿の西のひさしにて

御笛ふかせ給ふ高遠の大貳にて物し給ふ事琴笛

二してたかさこをおり返しふかせ給へるは猶いみしうめてたしと

いふもよのつねなり御笛の師にて其事ともなと申給いとめてたしみす

のもとにあつまり出て見奉るおりなとは我身にせりつみしなとおほ

ゆる事こそなければすけたたは木工のそうにて藏人にはなりたるいみしう

あらあらしううたてあれは殿上人女房はあらはにとそつけたるをかたに

つくりてさをなしのぬしをはわことの尋ねにそありけるとうたふをはおは

りのかねときかむすめのはらならけりこれか御笛にふかせ給ふをそひさ

ふらひてなをたかうふかせおはしませは聞さふらはしと申せはいかてかさ

りとも聞しりなんとてみそかにのみふかせ給ふをあなたよりわたらせおは

しましてこの物なかりけりたたいまこそふかめとおほせられてふかせ給ふ

いみしうおかし

身をかへたらん人はかくやあらんとみゆる物

はたたの女房にてさふらふ人の御めのとになりた

るからきぬもきすもをたによういははきぬさまにて御前にそひふして御

丁のうちをぬ所にして女房ともをよひつかひつほねに物いひ

やり文とりつかせなとしてあるさまよひつくすへてたにあらすさうし

きの藏人になりたる

こそ霜月のりんしのまつりにみこともたりし人ともみえず

君たちにつれたちてありくはいつくなりし人そとこそおほゆれほかよ

りなりたるなとおなし事なれいとさしもおほえず

雪たかうふりていまも猶ふるに五位も四位も色うるはしうわかやかな

るかうへのきぬの色はいときよらにてかめのおひのつきたるをとのぬ

すかたにてひきはこへてむらさきのも雪にはえてこさま

りたるをきてあこめの紅ならずはおとろしき山吹を

いたしてからかささをさしたるに風のいたく吹てよこさまに雪をふきかく
れは少かたふきてあゆみくるふかくつはうくわなどのきは

まて雪のいとしろくかかりたるこそおかしけれ

ほそ殿のやり戸をおしあげたれは御ゆ殿のめんたうよりおりて

くる殿上人のなへたるなをしさしぬきをいたくほころひたれは

をしいれなし北陣のかたさまにあゆ

み行にあきたるやり戸もすきねはゑいをひきこしてかほにふたきて

過ぬるもおかし

たたすきに過る物ほあけたる船人のよはひ春夏秋冬

ことに人にしられぬ物人のめおやの老たるくゑにち

五六月のゆふかたあをき草をほうにうるはしくきりて

あかきぬさたる男のちいさき笠をきて左右に

いとおほくもちてゆくこそすするにおかしけれ

賀茂へ詣る道に女とものあたらしきをしきのやうなる物を

笠にきていとおほくたてり歌をうたひおきふすやうに見えてたたたに

すともなくうしろさまにゆくはいかなるにかあらんおかしと見る

ほとに郭公をいとなめくうたふ聲そ心うき時鳥よをれよか

やつよおれなきてそわれはたにたつとうたふに聞もはてすいかなりし人

かいたくなきてそといひけんなかたかわらはをひいかておとす人と

驚には郭公はおとれるといふ人こそいとつらうにくけれうく

ひすはよるなかぬいとわろしすへて夜るなく物はめてたしちともそはめてた

からぬ

八月つこもりにうつまさにもうつとてほに出たる田に人いとおほく

てさはいねかるなりけりさなへとりしいつのまにとはまことけに

さいつ比かもにまうつとて見しかあはれにもなりにけるかなこれは女もま

しらす男のかたにいとあかきいねのものはあをきをかりもちて

かたなか何にかあらん本をきるさまのやすけにめてたきことにいと

せまほしく見ゆるやいかてさすらんほをうへにてなみをるいとおかし

うみゆいほのさまことなり

いみしくきたなき物なめくちゑせいたしきのははき殿上のかうし

せめておそろしき物よるなる神ちかとなりぬす人のいりたる我すむ所

にいりたるはたた物もおほえねはなにともしらす

たのもしき物心ちあしき比僧あまたしてすほうしたるおもふ人の心

ちあしき比誠にたのもしき人のいひなくさめたのめたる

物おそろしきおりの親とものかたはら

みみしうしたててむことりたるにいとほとなくすまぬむこのさるへき所な
とにてしうとにあひたるいとをしとや思ふらんある人のいみしう時にあひ
たる人のむこになりてたた一月はかりもはかかしうもこてやみにしかはす
へていみしういひさはきめのとなとやうの物はまかまかしき事ともいふ
もあるにそのかへるとしの正月に藏人になりぬあさましうかかるなからひ
にいかてとこそ人はおもひいためれなといひあつかふは聞らんかし二月
に人の八講し給ひし所に人々あつまりて聞しにこの藏人になれるむ
このろつうへのはかますわうかさねくるはひなといみしうあさやかにて
わすれにし人の車のとみのををひきかけつばかり

にてゐたりしをいかに見るらんと車の人をしりたる限りはいとをし
かるをこと人とももつれなくゐたりし物かなとのちにもいひき猶男
は物のいとをしさ人のおもはん所はしらぬなめり人のむすめはいふへき
にもあらず宮つかへをすともとしわかう世中いとぶくつろきなれさらんは猶
たた

うれしき物またみぬ物語のおほかる又ひとつをみていみしうゆかしう
おほゆる物語の二見つけたる心おとりするやうにもありかし

人のやりすてたる文を見るにおなしつつきあまた見つ
けたるいかならと夢をみておそろしとむねつふるるにことにも

あらずあはせなとしたるいとうれしよき人の御まへに人々あまたさぶらふ
おりにむかしありける事にもあれいまきこしめし世にいひける事にもあ
れかたらせ給を我に御らんしあはせての給はせいひきかせ給へるいと
うれしとをき所はさらなりおなし都のうちなから身にやん

ことなく思ふ人のなやむききていかにいかにとおほつかなくなけく
をこりたるせうそこえたるもうれし思ふ人の人にもほめられや
ん事なき人などのくちおしからぬものにおほしの給物のおりもしは
人といひかはしたる歌の聞てほめられうちきくなとにほめらるる

身つからのうへにはまたしらぬ事なれと猶おもひやらるるによいたう打
とけたらぬ人のいひたるふるき事のしらぬをききてたるもうれしのち
に物の中などに見つけたるはおかしうたたかうこそありけれとか

のいひたりし人そおかしきみちのくにかみしろき
しきしたたのもしろつきよきはえたるもうれしは

つかしき人の歌のもとすゑとひたるにふとおほえたる我なからうれしつ
ねにはおほゆる事も又人のとふにはきよくわすれてやみぬるおりそお
ほかるとみにものもとむるにいひ出たるたいまみるへき文なとをもとめ
うしなひて萬物を返々見たるにさかしいてたるいとうれし物

あはせなにくれのいとむ事かちなるいかてかうれしからさらん又い

みしう我はとおもひてしりかほなる人はかりえたる女なとよりも男
はまさりてうれしこれかたうはかならずせんすらんとつねに心つかひ
せらるるもおかしきにとつれなくなにおもひたらぬさまにてたゆめ
すもおかしにくき物のあらきめみるもつみはうらんと思ひながら
うれし

さしくしむすはせておかしけなるも又うれし又おほかる物
を曰ころ月比なやみたるかをこたりたるもいとうれし

おもふ人は我身よりもまさりてうれし

御前人々所もなくゐたるにいまのほりたれは少

とをきはしらのもとなどにゐたるを御覽しつけてこちこちと仰

られたるはみちあけてちかくめしいれたるこそうれしけれ

御前に人々あまた物仰らるるついでなにも世の中のはら

たたしうむつかしうかた時あるへき心ちもせていつちもいつちもいき

うせなはやと思ふにたたの紙のいとしろうきよらなるよき筆

しろきしきしみちの國かみなとえつれはかくて

もしはしありぬへかりけりとなんおほえ侍か又かうらいはしのた

みの莖あをうこまかにへりのもんあやかにくろう

しろう見えたるひきひろけて見ればなにかなをさしに此世は

えおもひはなつましといのちさへおしくなんなると申せはいみしくはかなき

事にもなくさむなるかなをはずて山の月はなる人の見るにかとわ

らはせ給ふさふら■人もいみしくやすきそくさいのいのりかなといふさ

てのちにほとへてすする事を思もしくみてさかにある比めてたき

かみを廿つつみにつつみてたまはせたり仰事にはとくまいれ

などの給はせてこれはきこしめしをきたる事ありしかはなんわるかめ

れはすみやう経もかくましけにこそと仰られたるいとおかしむけ

に思ひわすれたりつる事をおほしをかせ給へりけるはなをたた人にてた

におかしましてをろかならぬ事にそあらぬや心もみたれて

けいすへきかたもなけれはたた

かけまくもかしこき神のしるしには鶴のよはひに成ぬへき哉

あまりにやとけいせさせ給へとてまいらせつ大はん所のさうしを御つか

ひにきたるあをきひとへなとらせて誠にこのかみをさ

うしにつくりてもてさはくにむつかしき事もまきる心ちしておかしう

心のうちもおほゆ二日はかりありてあかききぬきたる男のたた

みをもてきてこれといふあれはたれそあらはなりなと物はしたなういへは

さしをきていぬいつこよりそとへはまかりにけりとりいれたれ

は事さらに御座といふたたみのさまにてかうらいなときよらなり心

の内にはさにやあらんとおもへは猶おほつかなきに人ともいたしてもとめさすればうせにけりあやしかりわらへとつかひのなればいふかひなし所たかへなとならばをのつからも又いひにきなん宮の邊にあないしにまいらせまほしけれと

猶たれかするにさるわさはせん仰事なめりといみしうおかし

二日はかりをともせねはうたかひもなくてさ京の君のもとにかかる事なんある事やけしきみ給ひし忍てありさまの給てさる事みえす

はかく申たりともなちらし給ひそといひにやりたるにいみしうかくさせ給し事也ゆめゆめ丸かきこえたるとな後にもとあれはされはよとおもひしもしるくおかしくて文かきて又みそかに御前かうらんにをかせし物はまとひしほとにやかてかきおとしてみはしのもとにおちにけり

關白殿二月十日のほとに法興院の尺泉寺といふ御堂にて一切經

供養させ給に院宮の御前もおはしますへければ二月朔日の程に

二條の宮へいらせ給夜ふけてねふたくなりにはかは何事も見いれすつと

めて日のうららかにさしいてたるほとにきたれはいとしるうあたらしうおかしけにつくりたるにみすよりはしめて昨日かけたるなめり御しつひ

ししこまいぬなといつのほとにかいりぬけんとおおかしきさくらの一

丈はかりにていみしうさきたるやうにてたたいまみはしのもとにあればいととうさきたるかな櫻こそたたいまさかりなめれとみゆるはつくりたる

なめりすへて花のにほひなとさきたるにおとらすいかにうるさかりけ

ん雨ふらはしほみなんかしとみるそくちおしきこ家なといふ物のお

ほかりける所をいまつくせ給へればこたちなどの見所あるをいまた

なしたたやさまちかくをかしけなり殿わたらせ給へりあをにひのかた

もんの御さしぬきさくらのなをしに紅の御そ三はかりたた御な

をしにかさねてそ奉りたる御前よりはしめて紅のこきう

すきおり物かたもんりうもんなどそのおりはこの八丈といふたけたかはこの

とになかりきあるかきりきたれはたたひかりみちてからきぬはもえ

き柳紅なともあり御前にぬさせ給て物なときこえさせ給ふ御

いらへのあらまほしさをさとなる人々にはつかにのそかせはやと見奉

る女房ともを御覽しわたして宮に何事をおほしめすらむこ

らめてたき人々をなめすへて御覽するこそいとうら山しけれひ

とりわろき人なしやこれ家家のむすめそかしあはれなりよ

くかへり見てこそさふらはせたまはめさても此宮の御心をはいかに

しり奉りてあつまりまいり給へるそいかにいやしく物

おしみせさせ給宮とて我はむまれさせ給ひしよりいみしうつかふま

つれとまたおろしの御そ一たはぬそなしかしりうこと

にはきこえんなとの給かをかしきにみな人々わらひぬ

誠にめをこなりとてかくわらひいますかりふりはつかしなどの給

はするほとに内より御使にて式部の僧なにかしまいれり御文は

大納言殿とり給ひて殿に奉らせ給へはひきときていとゆかしき御文

かなゆるされ侍らはあけて見侍らんと給はすれはあやしとお

ほいためりかたしけなくもありとて奉らせ給へはとらせ給てもひろけ

させ給ふやうにもあらずもてなさせ給ふ御よういなとそありかたきすみのま

より女房しとねさしいて三四人御木丁のもとにゐたりあなたにまかり

てろくの事物し侍らんとてたさせ給ひぬるのちに御文御覽す

御返は紅のかみにかかせ給かそのおなし色にほひかよひ

たる猶かうしもおしはかりまいらする人はなくやあらんとそくちおしきけふ

はことさらにとて殿の御かたよりろくはいたさせ給女のさうそくにこ

うはいのほそなかをへたりさかなたとあれはゑはさまほしけれとけふは

いみしきことの行幸にあかきみゆるさせ給へと大納言殿にも申てたちぬ

君たちなといみしうけさうしたて紅梅の御そともをとらしとき給へる

に三の御前はみくしけ殿なりひめ君よりもおほきにこゑ給てうつなと

聞えんにそよかめるうへもわたらせ給へり御木丁ひきよせてあたらしくま

いりたる人々には見え給はねはいふせき心ちすさしつとひはかの

ひのさうそくあふきなどの事をいひあはするもあり又いとみかはして

まるはなにかたたらんにまかせてをなといひてれいの君なとにく

まるよさりまかへる人もおほかりかかる事にまかつれ

はえととめさせ給はすうへひひにわたりよるもおほしきん

たちなとをはずれば御まへ人すくなく候はねはいとよし内の御使曰日

にまいる御前の櫻色はまさらて日なとにあたりてしほみ

わろうなるにわひしきに雨のよるふりたるにつとめていみしうむ

とくなりいととくおきてなきてわかれんかほに心をとりこそすれとい

ふをきかせ給ひてけり雨のふるけはひしつかしいかならんとておとる

かせ給に殿の御かたよりさぶらひのものともけすなときてあま

た花のもとにたたよりにてひきたをしとりてみそかにいきてまたくら

からんにとれとこそ仰られつれあけすきにけりふひんなるわさかなとく

とくとたをしとるにいとおかしくていははいはんとかねすみか事をおも

ひたるにやともよき人ならはいはまほしけれとかの花ぬす人はたれそ

あしかめりくてんしらすりけるよといへはわらひていとにけてひきもてい

ぬなを殿の御心はおかしうおはすかしくきともぬれまるかれつきて

いかにみるかひなからましと見ていりぬかもん

つかさまいりて御かうしまいり殿もりの女官御きよめ参はてて

おきさせ給へるに花のなければあなあさまし彼花はいつちいけ
ると仰らるあか月ぬすむ人ありといふなりつるは猶枝

なとを少おるにやとこそ聞つれたかしつるそみつやと仰ら

るさも侍らすいまたくらくてよくも見侍らさりつるをしろみたる物の
侍れは花折にやなとうしろめたさに申侍りつると

申さりと么かくはいかてかたらん殿のかくさせ給へ

るなめりとてわらはせ給へはいてよも侍らし春風にして侍ならんと

けいするをかくいはんとてかくすなりけりぬすみにはあらてふりにこそふる
なりつれと仰らるるもめつらしき事ならねといみしうそめてたき

殿おはしませはねくたれのあさかほも時ならずや御らんせんとひきいら
るおはします儘にかの花はうせにけるはいかにかくはぬすませしそいき
たなかりける女房たちかなしらすりけるよとおとるかせ給

へはされと我よりさきにとこそおもひ侍めりつれといふをい

ととく聞つけさせ給ひてさ思ひつる事そよにこと人まつ出てみつけ

し宰相とそこのほとなんとをしはかりつとていみしうわらはせ給さり
けなるものを少納言は春風に仰けると宮の御前の打わらはせ

給へるめてたしかことおほせ侍なりいまはや又もつくら

んとうちすむせさせ給へるもいとなまめきおかしさてもねたく見付
られにけるかなさはかりいましめつるものを人の所にかかるしれ

ものあるこそとの給はす春風は空にいとおかしういふかな
なとすんせさせ給たたことにはうるさくおもひよりて侍りつ

かしけさのさまいかに侍らましとてわらはせ給をこわか君されとそれはい
ととくみて雨にぬれたるなとおもてふせなりといひ侍りつと

申給へはいみしうねたからせ給ふもおかしさて八月九日のほとに
まかつるをいますこしちかうなしてなと仰らるれといてぬいみし

うつねよりもてるたるひるつかた花のころひけたりやいかか

いふとの給はせたれは秋かうまたしく侍れとよにこの度なんのほる心ち
して侍なときこえさせたりといてさせ給ひしに車のしたひもなくま

つまつとのりさわくかくければさるへき人三人と猶この車にのり

さまのいとさはかしくまつりのかへさなどのやうにたうれぬへくまどふ
いと見くるしたたさはかれのるへき車なくてえまいらすはをのつ

から聞召つけて給はせてんなとわらひあはせてたてるまへより

をしこもりてまどひのりはてて出てかうかといふにまたここにとい

らふれは宮つかさよりきてたれたれかおはするととひききていとあやしか
りける事かないまはみなのに給ひぬらんとこそおもひつれはなとてかく
はをくれさせ給へるいまはとくせんをのせむとしつるにめつらかなりやな

と■とろきてよせさすればさはまつその御心にしありつらん人をのせ
給ひてつきにもといふこゑ聞つけてけしからすはらきたなくお

はしけりなといへはのりぬそのつきには誠にみつしか車に

あれは火もいとくらきをわらひて二條の宮にまいりつきたりみこし
はとくいらせ給てみなしつらひさせ給けりここにまつと仰られけれ
はさい京のせうに右近なといふわかき人々まいる

人ことにみれとなかりけりおるるにしたかひて四人つつまいりて御
前に候にあやしきはいかなるそと仰られけるもしらすある

かきりをりはててそからうして見つけられてかはかり仰らるるにはなと
かくをそくとてひきゑてまいるにみれはいつのまにかうは年比のす

まいのやうにおはしましつきたる■もとをかしいかなれはかうなにかとたつ
ぬる迄は見えさりつるそと仰らるるにともかくも申さねはもろと

もにのりたる人いとわりなしはいはての車に侍らん人は

いかてかとかはまいり侍らんこれもほとほとえのるましく侍つるをみつしか
いとおしかりてゆつり侍りつる也くらふ侍りつる事そわひしう侍りつ
れとわらふわらふけいするに行事する物のいとあやしきなり又なとか

は心しらさらんものこそつつまめうゑもんなどはいへかしなと仰
らるされといかてかしりさきたち侍らんなどいふもかたへの人にくし
と聞らんとときこゆさまあしうてかくのりたらんもかしこかるへき事

かはさためたらんさまのやことなからんこそよからめとものしけにおほし
めしたりおり侍るほどの待とをにくるしきによりてにやとそ申な

す御經の事にあすわたらせおはしまさんとてこよひまいり南の
院の北面にさしのそきたれはたかつきとも火ともして

ふたりみたりよたりとさるへきとちへたてるもあり木丁

なかにへたてたるもあり又さらてもあつまりゑてきぬとちか
さねものこしさしけさうするさまはさらにはすかみなとい

ふものはあすより後はありかたけにぞ見ゆるとらの時に

なんわたらせ給へかなるなとかいままでまいり給はさりつるあぶきもたせ
て尋ねきこゆる人ありつなとつくさて誠にとらの時かとさうそきたて
てあるにあけすき日もさしいてぬにしのたいのからひさしなんさ

しよせてのるへきとであるかきりわた殿ゆくほとにま

たうぬうぬしきほとなるいままいりともはいとつつましけなるにしのたい
にとのすませ給へは宮にもそこにおはしまして

まつ女房車にのせさせ給ふを御覽すとてみすの内

に宮しけいしや三四の君殿のうへその御をとつと三所たちな
みておはします車の左右に大納言三位の中將二所してすたれ

うちあけ下すたれ引あけてのせ給ふみなうちむれてたにあらは
かくれ所やあらん四人つつかきたてにしたかひてそれそれとよひ
たててのせ奉りあゆみ行心ちいみしう誠にあさましうけせう

なりとも世のつねなりみすの内にそこらの御めともの中にも宮の御前
の見えるしと御らんせんはさらに佗しき事かきりなし身よりあせ
のあゆれはつくるひたてたるかみなとも

あかりやすらんとおほゆかしこうしてすきたれは

いみしうはつかしけにきよけなる御さまともしてうちゑみて見給うつな
らすされとたうれすそこまでいつきぬるこそかしこきかほもなきか

とおほゆれとみなのはてぬれはひき出て二條の大路にしちたて
て物見車のやうにてたちならへたるいとおかし

人もさ

見るらんかしと心ときめきせらる四位五位六位などいみしうめて
ゐて車のもとにきてつくるひ物いひなとす

まつ院の御迎に殿をはしめ奉

りて殿上人地下とみなまいりぬそれ渡らせ給ひてのち宮はいてさ

せ給へしとあれはいと心もとなしとおもふほとに日さしあかりてそおはしま

す御車こめ十五まつは尼車一の御車は唐の車

なりそれにつつきて尼車しりくちよりすいしやうのすすうす

すみけさきぬなといみしくすたれはあけす下すたれもつす色

のすそ少こきつきにたたの女房十さくらのからきぬうす色

の裳紅をしわたしかとりの上きともいみしうなまめかし日はい

とつららかなれと空はあさみとりにかすみ渡

るに女房のさうそくのほひあいていみしきおり物の色う

らきぬなとよりもなまめかしうおかしき事かきりなし關白殿その御つき

の殿原おはするかきりもてかしつき奉らせ給いみ

しうめてたしこれらまつ見奉さわくこの車ともの廿たて

ならへたるも又おかしとみるらんかし

いつしか出させ給ははなと待きこえさする

にいかなるならむと心もとなくおもふにからうしてうねめ八人馬

にのせてひきいつめりあをすその裳くんたいひれいなどの風に吹や

られたるいとおかしふせんといふうねめはくすししけまさかしり人

なりえひ染のおり物さしぬきをきたれはいと心ことなりしけまさは

色ゆるされにけりと山の井の大納言わらひ給てみなのりつつきてたてる

にいまそ御こしいてさせ給めてたしとみえてまつりつる御ありさまにこ

れはくらぶへからさりけり朝日はなはなとさしあかるほとに木

のはのいとほなやかにかかやきてみこしのかたひらの色つやなと
さへそいみしきみつなはりて出させ給

御こしのかたひらのうちゆるきたるほど誠にかしらのけな

と人のいふはさらに空事ならずさて後にかみあしからん人もかこち
つへしあさましういつくし猶いかてかかる御前になれつかうまつらん
と我身もかしこおほゆれ御こし過ぎさせ給ふほと車とものしち

人たまひにかきおろしたりつる又うしともかけて御こしの

しりにつつきたる心ちのめてたうけうあるありさまいふ方なしおはしま
しつきたれは大門のもとにもろこしのかくしてしこまいぬをとり

まひさうのをとつつみの聲にももおほえずこはいつくの佛の

御國などにきにけるにかあらんとそらにひひきのほるやうにおほゆうちに
入ぬれば色々のにしきのあけはりにみすいとあをくてかけわたしへいま
んなとひきたるほとなへてたたにこの世とおほえず御さしきにさ

しよせたれは又この殿原たち給ひてとくおりよとの給のりつる所た
にありつるをいますこしあかうけせうなるに大納言殿いと物々しくきよ
けにて御したかさねのしりいとなく所せけにてす
たれうちあけてはやとの給つくろひそへたるかみも

からきぬ中にてふくみあやしうなりにたらむ色のくろさありささへ
見わかれぬへきほとなるか

それもおなし心にやしりそかせ給へかた

しけなしなといふはち給かなとわらひてたち給へりからうしておりぬ
れはよりおはしてむねたかなとに見せてかくしておるせと宮の仰らるれ
はきたるに思ひくまなきとてひきおろしてゐてまいり給ふさ聞えさ

せ給ひつらんとおもふかたしけなしまいりたれははしめおりける人と
もの物のみえぬへきはしに八人はかりいてゐにけり一尺よ二尺はか

りのたかさのなけしうへにおはしますここにたてかくしてゐてまいり
たりと申給へはいつらとて木丁のこなたにいてさせ給へりまたか

らの御そも奉なからおはしますそいみしき紅の御そよ

ろしからんや中にかあやの柳の御そえひ染の五重の御

そにあか色のからの御そちすりのからのうす物にさうかんか

さねたる御裳なと奉りたり物の色さらになへてにるへ

きにやうなし我をはいかか見ると仰らるいみしうなん候つる

なともことに出てはよのつねそひさしうやありつるそれは殿の大

夫の院の御ともきて人に見えぬるおなし下かさねながら宮の御ともにあ
らんわろしと人おもひなんとてことしたかさねぬはせ給ひけるほとを
そきなりけりいとすき給へりなとて打わらはせ給へるとあきらかに

はれたる所いますこしけさやかにめてたく御ひたいあけさせ給へ
りけるさいしに御わけめ御くしのいささかよりてしろく見えさせ給ふ
なとさへそ三尺の御木丁ひとよるいをさしちかへてこな
たのへたてにはしてそのうしろにはたたみ一ひらをなかさまにはしを
してなけしのうへにしきて中納言の君といふはとの御をちの右兵衛
督たたきみと聞えけるか御むすめ宰相の君とはとみの少路の左
大臣殿の御孫それふたりそうへにみて見え給ふ御覽し渡して
宰相はあなたにゐてうへ人のとものみたる所いきて見よと仰ら
るるに心えてここに三人いとよく見侍ぬへしと申せはさはとて
めしあなさせ給へはしもゐたる人々殿上ゆるさるそとてとねり
とわらはこそあらせんとおもへるといへはむまへの
ほとそなといへとそこにいりみて見るはいとおもたたしかかる事な
とそ身つからいふはぶきかたりにもあり又君の御ためにもかるかる
しうかはかりの人をさへおほしけんなどをのつから物しり世中もとき
なとする人はあいなくかしこき御事かかりてかたしけなけれとある事
なとは又いかかは誠に身のほとすきたる事もありぬへし
院の御さしき所々のさしきも見わたしたるめてたし殿は
まつ院の御さしきにまいり給てしはしありてこ

にまいり給へり大納言ふた所三位中將は陣ちかうまいり
けるままたててうとおいていとつきつきしうておはず殿上人四
位五位こちたう打つれて御とに候てなみあたりいらせ給ひて見奉
らせ給に女房あるかきりもからきぬみくしけ殿までき給
へり殿上は裳のうへにこうちきをそき給へる繪にかきたるやうな
る御さまともをいまいらへけふはと申給そ四位の君宮の
御裳ぬかせ給へこのしふには御前こそおはしませ御さしきのま
へに陣をすへさせ給へるはおほけの事かとそうちなかせ給
けにもみな人も涙くましきにあか色に櫻の五えのからき
ぬををきたるを御らんして法服一具たり給へるを俄にい
ま一えしつるにこれをこそかり申へかりけれさらはもし又さやうの
ものをきりしらめたるにとの給はするに又わらひぬ大納言殿すこ
ししりそきぬ給へるききてさいそうへのにやあらんとの給
一こととしておかしからぬ事そなきや僧都の君あか色のうす物
の御ころも紫のけさいとうすき色の御そともさしぬき
き給て菩薩の御やうにて女房

にましりありき給ふもいとおかし僧綱の中に威儀具足してもお
はしまさて見くるしう女房の中になとわらふちちの大納言殿御前

より松君みて奉るえひ染のおり物のなをしこきあやのうちた
る紅梅のおり物なときたまへりれいの四位五位いとおほかり
御さしきに女房の中にいれ奉るなに事あやまりにか

なき物のしり給さへいとへはへし事はしまりて一切經をはすの花にあ
かき一部つついれて僧俗上達部殿上人地下六位なにくれまて
もてわたるいみしうたうとし大行道系かうしはし待て舞

なとする日くらし見るにめもたゆくくるしう内の御使に五位の藏
人まいたりたり

けにそ猶めてたき

御ともに候へとせんし侍

つとて歸りもまいらす宮は猶かへりてのちにとの給はすれとも又藏
人の辨まいりて殿にも御せうそこあれはたた仰のままとていら

せ給なとす院の御さしきよりちかのしほかまなとやうの御せうそこ
おかしき物なともてまいりかよひたるなともめてたし事はてて

院かへらせ給上達部なと此度はかたへそつかうまつり

給ける宮は内へいらせ給ぬるもしらす女房のすさともは二條宮

そおはしまさんとてそこにみないきぬてまてとまてと見えぬほと
に夜いたうふけぬ内にはとのみ物もてきたらんと待にきよくみえ
すあさやかなるきぬの身に物つかぬをきてさむきままにくみは

らたてとかひなしつとめてきたるをいかにかく心なきそなといへとの

ふる事もさいはれたり又の日雨ふりたるを殿はこれになん我す

くせはみえ侍りぬるいかか御覽すると聞えさせ給ふも御心おち

ことはり也

たうとき事九條錫杖念佛のゑかう

歌は杉たてる門神樂哥もおかしいまやうはな

かくてくせつきたるぶそくよくうたひたる

さしぬきはむらさきのこきもえき夏はふたあひいとあつき比夏蟲の

色したるもすすしけなり

かりきぬはかう染のうすきしるきふくさのあか色松のは色した

るあを葉櫻柳又あぶきぶち

おとこはなに色のきぬもひとへはしろきひのさうそくの紅

のひとへあこめなとかりそめにきたるはよしされと猶色

きはみたるひとへなときたるはいと心つきなしねり色のきぬも

きたれと猶ひとへはしろうてそ

おとこもをんなもよるつの事まさりてわるき物

ことはのもしあやしくつかひたるこそ

あれたたもし一にあやしくもあてにもいやしくもなるはい

かなるにかあらんさるはかうおもふ人よろつの事にすぐれてもえあらしか
しいつれをよきあしきとはしるにかあらんさりとも人をしらししたた

さうちおほゆるもいふめり

なんなき事をいひてその事させんとすといはん

といふをともしをうしなひてたたいはんする

さとへいてんするなといへはやかていとわろしまして文をかきては
いふへきにもあらず物語こそあしうかきなしつれはいふかひなく

つくり人さへいとをしけれなをす定本のままなとかきつけたるいとく
ちおしひてつくるまになといふ人もありきもとむといふ事を見

んとみないふめりいとあやしき事を男なとはわさとつくる

はてことさらにいふはあしからす我ことはにもてつけていまか心をと
りする事也

したかさねは冬はつつしかひねりかさねすわつかさね夏はふたあゐし
らかさね

扇のほねはほを色はあかきむらさきはみとり

ひあふきはむもんから繪

神は松の尾八幡此國の御門にておはしましけんこそいとめてたけれ
行幸などにきの花のみこしに奉るなとてたし大原のつ

みていけはをしなととおかし賀もはさならいなり春日いとめて
たくおほえさせ給ふさほ殿なといふ名さへおかし平野はいたつらな

るやのありしをこはなにす所そととひしかはみこしやとりといひし
もめてたしいかきにつたなとおほくかかりても

みちの色々ありし秋にはあへすとつらゆきか歌おもひ出られてつ

くつくとひさしうたれたりしかみこもりの神いとおかし

さきはからさきいか崎みほか崎

屋はまるやあつまや

時奏するいみしうおかしさむきに夜中はかりなとにこほこほとこ

ほめきくつすりてきてつるうちなとしてなんけのなにかし時つしみつ子よつ
なと時のくぬさすをとなといみしうおかしね丸

うしやつなとこそさとひたる人はいへすへてよる

のみそくぬはさしける

日のつらうらとあるひるかたいたう夜更てねの時なと

おもひまいらする

ほとにおのことめしたるこそいみしうおかしけれ夜中斗に又御笛
のきこえたるいみしうめてたし

成信中將は入道兵部卿宮の御子にてかたちいとおかしけに心は
へもいとおかしうおはす伊与のかみかねすけかむすめのわすられていよへ親
のくたりしほといかにあはれなりけんところおほえしかあか
つきにいくとてこよひおはしましてあり明の月にかへり給けんをしす
かたなとこそそのかみつねにゐて物語し人のうへなとわるきはわ
ろしなとの給しにものいみなとくすしう

する物の猶さうにてもたる人のあるかこと人の子に
なりて平なといへとたたそのものしやうをわかき人々こと草にて
わらふありさまもことなる事なし兵部とておかしきかたなともかたきか
さすかに人なとにさしましり心なとのある御前渡りに見くるし
なと仰らるれとはらきたなくしりつくる人もなし一條院つくら
れたるひとまの所にはつらき■をはさらによせず東の御門に

つとむかひておかしきこひさしにしきふのおとももに夜もひ
るもぬれはうへもつねにも御覽しに出させ給ふこよひはみなうち
ねんとて南のひさしにふたりにふたりふしぬるのちにいみしうた
く人のあるにうるさしなといひあはせてねたるやうにてあはれは猶

かしかましうよぶをあれをこそせならねならんと仰られければこの兵部卿
おこせとねたるさまなればさらにおき給はさり

けりといひにはいきたるかやかてゐつきてものいふなりしはしかとおもふに
夜いたうふけぬ權中將こそあなれこそ何事をかうはいふとてた
たみそかにわらふもいかてかしらんあかつきまであかし

てかへりぬこの君いとゆかしかりけりさらにおはせん物にいはいし
何事をさはいひあかすそなとわらふにやり戸を明て女はいりぬ
つとめてれいのひさしに物いふをきけは雨のいみしうふる日

きたる人なんいとあはれなり日ころおほつかなふつらき事ありともさて
ぬれてきたらはうき事もみなわすれぬへしとはなとていふにかあらんさ
らんをよへ昨日の夜も一昨日の夜もそれかあなたの夜もすへて此比
はうちしきり見ゆる人のこよひもいみしからん雨にさはらてきたらんは
一夜もへたてしとおもふなめりとあはれなるへしとさて日比も見え

すおほつかななくてすこさん人のかかるおりにしもこんをはさらに又心さし
あるにはえせしところ思へ人の心えはにやあらん物

見しりおもひしりたる女の心ありと見ゆる■とをはかたらひてあまたい
く所もありものよすかなともあはれはしけつしもえこぬをなをさり
しいみしかりしおりにきたりし事なともかたりつき身をほめられんと
おもふ人のしわさにやそれもけに心さしなからんにはなにしにかはさ
もつくり事しても見むとも思はんされと雨のふる時はたた

むつかしう今朝までははれはれしかりつる空ともおほえすいみしき
ほそ殿のめてたき所ともおほえすましていとさらぬ家などはとく
ふりやみねかしとそおほゆる

月のあかきにきた

らむ人はしも十日廿日一月もしは一年にてもまして七八年になりても
おもひ出たらんはいみしうおかしとおほえてえあふましうわりなき所
人めつつむへきやうありとかならずたちなから物いひて返し又
とまるへからんをはとめなとしつへし月のあかきはかりと

をく物おもひやられすきにし事うかりしもうれしかりしもおかしとお
ほえしもたたいまのやうにおほゆるおりはあるこまの物語はなに
はかりおかしき事もなくことはもふるめき見所おほからねと月にむ
かしをおもひ出てむしはみたるかはほりとり出てもとこしこまにとひ
てたてるかとあはれなるなり雨は心もとなき物と思ひしり

たれはにや時ふるもいとにくそあるやん事なき事おもしろかる

へきたうとくめてたかるへき事も雨たにふれはいふかひなくくち

おしきに何かとぬれてかこちたらんたにかたのの少將

おちくほの少將などは

あしあらひたるはにくしきたなかりけりかたのはむま

のむくるにもおかしそれもよへおととひの夜ありしかはこそおかしかりけれ
さらてはなにかは風なとふきあらあらしき夜きたるはたのもしくて

おかしうありなん雪こそめてたけれ

なをしなとはさらにもいはすかりきぬ

上の藏人のあを色のいとひややかにぬれたらんはいみし

うおかしかるへしろうさうなりとも雪にたにぬれなはにくかるましむかし
の藏人などの人のもとなどにあを色をきて雨にぬれ

てしほりなとしけるとかいまはひるたにきさめなりたたるうさうをのみこ
そかつきためれゑふなどのきたるはましていとおかしかりし

物をかく聞て雨にありかぬ人やあらんすらん月のいとあか

き夜紅のかみのいみしうあかきにたたあらすともとかきたるをひさ

しにさしたるを月にあてて見しこそおかしかりしか雨

ふらんおりはさばりなんや

つねに文おこする人なにかは今はいふかひなしいまはなといひて又
の目をとませねはさすかにあけたてはさし出るふみの見えぬこそさうなう
しけれと思ひてさてもきはきはしかりける心かななといひてくらしつ

又の日雨いたうふる日までをとませねはむけにおもひたえにけりな
といひてはしの方にあたるゆふ暮にかささしたるわらはのもてきた

るをつねよりもとくあけてみれば水ます雨のとあるをいとおほく
よみいたしつる歌ともよりはおかし

たたあしきはさしもあらさりつる空のいとくらうかきくもりて雪のかきく
らしふるもいと心ほそく見いたすほともなくとうしろくつもりて猶いみ
しうふるに隨身立てほそやかにひひしきおのこのから笠さして

そはのかたなる家の戸より入て文をさしいれたるこ
そおかしけれ

まし

てうちほほゑむいとおかし

きらきらしき物大將の御さきをひたる

孔雀經御讀經法は修法五大尊藏人の式部丞

白馬のおほちねりたる御齋會左右衛門佐すりき

ぬやりたる季の御讀經熾盛光御修法

神のいたくなるおりに神なりの陣こそいみしうおそろしけれ左右

大將中少將などのみかうしのつらにさふらひ給ふいとをかしけなりは
てぬるをり大將大殿のほりおりとの給らん

源六の御屏風こそおかしうおほゆる名なれかむなんきうの御屏風はお

おしくそきこえたる月次の御屏風もおかし

方たかへなとして夜ふかくかへる寒き事わりなくおとかいな

とも なおちぬへきをからうしてきつきて火おけひきよせたるに火のおほき
にて露くるみたる所なくめてたきをこまかなるはいの中よりおこ
し出たるこそいみしうれしけれ物なといひて

おこすこそにくけれされとめくり

をきて中に火をあらせたるはよしみな火をほかさまにかきやりてすみ
をかさねをきたるいたたきにひともをきたるか

とむつかし

雪のいとたかくふりたるをれいならすみかうしまいらせてすひつに火
おこして物語なとしてあつまりさふらふに少納言よかうるほづの雪

はいかならんと仰られはみかうしあけさせてみずをたかくあけ

たれはわらはせ給人々もみなさる事はしり歌なとにさへうたへとおも
ひこそよらさりつれ猶この宮の人にはさるへきなめりといふ

御やうしのもとなるわらはへいみしくものはしりたれはらへなとし

に出たれはさいもんよむ事人は猶さうきけちそとたちはしりてしろき
水いかけさせともいはぬにしありくさまのれいしりいささかしうに物

をいはせぬこそうらやましけれさらん人をかなつかはんとこそおほゆれ

三月はかり物いみしにとてかりそめなる人の家にいきたれは木

ともなとはかはかしからぬ中に柳といひてれいのやうになまめかし

くはあらて葉ひろうみえてにくけなるをあらぬ物なめりといへはかかるも
ありなといふに

さかしらに柳のまゆのひろこりて春もおもてをふまる宿かな

とこそみえしかそのころ又おなし物いみしにさやうの所にいてたる
に二日といふひるつ方いとつれつれまさりてたたいまも参ぬへ

き心ちするほとにしもあれはいとうれしくて見るあさみと

りのかみにさい相の君いとおかしくかき給へり

いかにして過にしかたをすこしけんくらしわつらふ昨日今日かな

となん私にはけふしもちとせの心ちするをあかつきにたにとくとあ

り此君のの給はんたにおかしかるへきをまして仰事のさまには

をろかならぬ心ちすれとけいせん事はおほえぬこそ

雲のうへもくらしかねつる春の日を所からとも詠めけるかな

わたくしには今夜の程も少將にやなり侍らんすらむとて曉に参

りたれば昨日の返しくらしかねけるこそいとにくしいみしうそしりきと

仰らるるいと侘しう誠にさる事も

清水にこもりたる比ひくらしのいみしうなくをあはれときくにわざと

御使しての給はせたりしからのかみのあかみたるに御うち

山ちかき入會のかねの聲ことにこふる心のかすはしるらん

ものをこよなのなかあやとかかせ給へるかみのなどのなめけならぬ

もとりわすれたる旅にてむらさきなるはちすの花にかきて参ら

する

十二月廿四日宮の御佛名の初夜御導師ききていつる人はよ中も過

ぬらんかしさとへもいてもしはしのひたる所へもよのほといつるにもあれ

あひのりたる道のほとこそおかしけれ日比ふりつる雪のけさはやみて風な

とのいたう吹つればたるひのいみしうしたるつちなとこそむらむらくろき

かちなれ屋のうへはたたをしなへてしろきにあやしきしつの屋も

おもかくしてあり明の月のくまなきにいみしうおかしかねなどをふ

きたるやうなるにすいしやうのくきなといはまほしきやうにてなかくみしか

くさうかけ渡したると見えていふにもあまりてめてたきたるひにし

たすたれもかけぬいとたかくすたれをあけたれはおくまでさし

いりたる月にうすいろ紅梅しろきなと七八はかりきたるう

へにこききぬのいとさやかなるつやなと月にはへておかしう見ゆるかたは

らにえひ染のかたもんのさしぬきしろききぬともあまた山吹紅な

ときこほしてなをしのいとしろきひもときたれはぬきたれられていみしう

こほれいてたりさしぬきのかたつかたはとしきみのとにふみいたされたる

なとみちに人のあひたらはおかしとみつへし月影のはしたなさにうしる
さまへすへりいてたるをつねにひきよせあらはになされてわふるもおかしり
んりんとしてこほりしけりといふ詩をかへすかへすんしておはするはいみ
しうおかしうて夜一よもありかまほしきにいとたかくすたれをあげたれは
おくまでさしりたる月にうす色紅梅しるきなと七八はかりきたるうへにこ
ききぬのいとさやかなるつやなと月にはへておかしういく所のちかくなる
くちおし

宮つかへする人々のいてあつまりてをのか
君々

その家あるしにてきくこそおかしけれ

家ひろくきよけにてしんそくはさらなりたたうちかたらひなとする人
人は宮つかへ人かたつかたにすへてあらまほしけれさるへき

おりはひと所にあつまりめて物語し人の讀たる歌なにくれ
とあたりあは世人の文なともてくるもろともに見返事かき又

むつまじうくる人もあるはきよけにうちしつらひていれ雨なとふりてえ
かへらぬもありおかしうまいらんおりはその事見入て

おもはんさまにしていたしたてなとせはやよき人のおはします御ありさまな
といとゆかしきそけしからぬにやあらん

見ならひする物あくひちこともなまけしからぬゑせ物

うちとくましき物あしと人にいはるる人さるはよしとしられた

るよりはうらなくそ見ゆるふねのみち日のうららかなるに海のおも
てのいみしうのとかにあをみとりうちたるをひきわたしたるやうにみえて

いささかおそろしきけしきもなきわかき女のあこめはかまきたる
さぶらひの物のわかやかなるもろともにろといふ物をして歌をい

みしうたひたるいとおかしうやんことなき人にも見せ奉らま
ほしうおもひいくに風いたう吹海のおもてのたたあしになるに物

もおほえずとまるへき所にこきつくるほとに舟になみのかけたるさ
まなるはさはかりなこりなかりつる海ともみえずかしおもへは舟

にのりてありく人はかりゆゆしき物こそなけれよろしきふか
さにてたにさまはかなきものにのりてこき行へき物にそあらぬやま

してそこひもしらす千色なとあらんに物いとつみいれたれは水
きはは一尺はかりたになきにけすものいささかおそろしともおもひ

たらすはしりありき露あらくもせはしつみやせんとおもふに大なる松
木なとの二三尺はかりにてまるなるを五六ほつほつとなけ入な

とするこそいみしけれやかたといふもののかたにておはすされとおくなるは
いささかたのもしはしにたてるものともこそめくるも心ちすればやを

つけてのとかにすけたる物のよはけさよたえなはなににかはなら

んふとおちいりなむそれたにいみしうぶとくなともあらず我のりたるは

きよけにもかうのすきかけつまとかうしあけなとしてされとひ

としようもけになともあらねはた家のちいさきにてありこと船

みやるこそいみしけれとをきは誠にささのはをつくりてうちちらしたる

やうにそいとよく似たるとまとりたる所にて舟ことに火ともしたる

おかしうみゆはし舟とつけていみしうちぬさきにのりてこきありく

つとめてなといとあはれなりあとのしら浪は誠にこそきえもてゆけよ

ろしき人はのりてありくましき事とこそ猶おほゆれかちも又いと

おそろしされとそれはいかにもいかにもつちにつきたれはいとたのもし

と思ふにあまのかつきしたるはうきわさなりこしに

つきたる物たえねはいかかせんとなんをのこたにせはさても

ありぬへきを女はおほろけの心ならし男はのりて歌なとうち

うたひてこのたくなはをうみにうけてありくいとあやうくうしろめたくはあ

らぬにやあまものほらんとてはそのなはをなんひくとかまとひくりい

るるさまそことはりなるや舟のはたをおさへてはなちたるいきなとこそ誠

にたたみる人たにしほたるるにおとしいれてたたよひありくおのこはめ

もあやにあさましかしさらに人のおもひかくへきわさにもあらぬ事にこそあ

めれ

右衛門のせうなるもののえせなるをやをもたりて人の見るにお

もてふせなと見くるしうおもひけるか伊與國よりのほとと海にお

とし入てけるを人の心うかりあさましかりける

ほとに七月十五日ほんを奉るとていそくを見給て道命阿闍梨

わたつ海におやををし入て此ぬしのほんするみるそ哀成け

る

と讀給ひけるこそいとおしけれ

また小野殿のははうへこそは普門寺といふ所に八講し

けるを聞て又の日小野殿に人々あつまりてあそひしふみ

つくりけるに

薪こる事は昨日につきにしをけふをのえはここにくださん

と讀給ひけんこそめてたけれこもとはうちききになりぬるなめ

り

又業平か母の宮のいよいよ見まくとの給へるいみしう

哀におかしひきあけて見たりけんこそおもひやらるれ

おかしとおもひし歌なとをさうしにかきてをきたるにけ

すのうちたひたるこそ心うけれよみにもよむかし

よろしき男をけす女などのめていみしうなつかしうこそおはすれ

なといへはやかておもひをとされぬへしそしらるるは中々よしけすにほめ
らるるは女たにわろし又ほむるままにいひそこなひつる物をは

大納言殿まいりて文の事なとそうし給にれいの夜いたうふけぬれば

御前なる人々二人つつよせて御屏風木丁のしもへこへやなと

にみなかくれふしぬればたはひとりになりてねふたきをねんしてさぶらぶに
うしよつとそうするなりあけ侍りぬなりとひとりこつに大納言殿いまさら
おほんとのこもりおはしますよとてぬへき物にもおほしたらぬをうたて

なにしに申つらんとおもへとも又人のあらはこそはまきれもせめう

への御前のはしらによりかかりてすこしねふらせ給へるをかれを見奉

り給へいまはあけぬるにかく御殿こもるへき事かはと申させ

給けになと宮の御前にもわらひ申させ給もしらせ給はぬほとにお

さめかわらはのには鳥をとらへてもちてあすさとへいかんとい

ひてかくしをきたりけるかいかかしけんいぬのみつけてをひければらうのさ
きににけいきておそろしうなきのしるにみな人おきなとしぬなりうへも
ちおとろかせおはしませいかにありつるそとたつねさせ給に大納言

殿のこゑめいわつのねふりをおとるかすといふ詩をたかう打いたし給へ
るめてたうおかしきに一人ねふたかりつるめいとおほきになりぬいみ
しきおりの事かなと宮もけうせさせ給猶かかる事こそめて

たけれ又の日はよるのおとにいらせ給ひぬ夜中はかりにらうに出て

人よへはおるるかわれをくらんとの給へは裳からきぬは屏風にうちか

けていくに月のいみしくあかくてなをしのいとしろう見ゆるにさしぬきの
なからぶみくくまれて袖をひかへてたうるなといひてぬておはするま
まに遊子なをのこりの月にゆくはとすんし給へる又いみしうめてた

しかやうの事めてまとふとてわらひ給へといかてか猶いとおかしきもの
をは

僧都の君の御めのとみくしけ殿とこそは聞えめままの

つほねにあたれはおのこあるいたしきのもとちかくよりきてからいめ

を見さぶらひつるたれにかはうれへ申さぶらはんとてなんとなきぬはかり

の氣色にていふなに事そと問へはあからさまにものへまかりたりしま

にきたなき侍る所のやけ侍りにしかはひころはかうなのやうに人の家
ともにしりをさし入てなんさぶらぶむまつかさのみくさつみて侍りける
家よりなんいてまうてきて侍也たたかきをへたてて侍ればよとのりねて
侍けるわらはへのほどをとやけ侍ぬへくてなんいささか物もとう侍す
なといひをるみくしけ殿聞給ひていみしうわらひ給

みまくさをもやすはかりの春の日によとのさへなどのこらざるらん

とかきてこれをとらせ給へとてなけやりたればわらひのしりてそこら
おはする人の家のやけたりとていとおしかりて給ふめるととらせた
れはなにの御たんしやうにか待らん物いくらはか

りにかといへはまつよめかしといふいかてかしたためもあきつかふまつらては
といへは人にもみせよたたいまめせはとみにてうへまいるそさはかりめて
たき物をえては何をかおもふとてみなわらひてまとひてのほりぬれは人
にや見せつらんさと聞ていかにはらたたんたと御前にまいりてままの
けいすれは又わらひさはく御前にもなとかく物くるをしからんとわらは
せ給

男はめをやなくなりておおやひとりあるいみしくおもへともわら

はしき北の方のいてきてのちはうらにも入られすさうそくなとの

事はめのと又こうへの人ともなとしてせさすにしひんかしのたいのほと

にまら人なといとおかしう屏風障子の糸も見所ありてすきあた

る殿上ましらひのほとくちおしからす人々もおもひたり上にも御けし

きよくてつねにめしつづ御あそひなとのかたきにはおほしめしたるに猶つね

に物なけかしう世中心にあはぬ心ちしてすきすきに心そかた

はなるあるへき上達部の又なきにもてかしつかれたるい

もうとひとりあるはかりにておもふ事をうちかたらひなくさめ所

定てそうつにうちきなしすひせいきみにあこめなしといひけん人もおか

し見しあわうとたれかいひけん

まことやかうやへくたるといひける人に

おもひたにかからぬ山の篠枕たれかいふきの里はつけしそ

ある女房の遠江守も子なる人をかたらひてあるか同宮人

をかたらふと聞てうらみければ親なともかけてちかはせ給

いみしきそら事なり夢にたに見すとなんいふいかかいふへきといふ

と聞しに

ちかへ君とをつあふみのかみかけてむけにはまなのはしみさりきや

ひんなき所にて人に物をいひけるにむねのいみしうはしりけるなと

かくはあるといひけるいらへに

あふ坂はむねのみつねにはしりぬのみつくる人やあらんと思へは

からきぬはあかきぬえひ染もえき櫻すへてうす色のるい

裳はおほうみしひら

おり物はむらさきもえきにかしはをりたるこつはいもよけれともな

を見さめこよなし

もんはあふひかたはみ

夏のうはきはうす物のかたつかたのゆたけきたる人こそにくけれとあま

たかさねきたれはひかれてきにくし綿なとあつきはむねなとも
きれすいとみくるしませてきるへき物にはあらず猶む
かしよりさまよくおきたるこそよけれひたりみきのゆ
たけなるはよしそれもなを女房のさうそくにては所せかめり
男のあまたかさぬるもかたはかまおもくそあらんかしきよら
なるさうそくのおり物うす物なといまはみなさこそあめれいま
やうに又さまよき人の給はんいとひんなき物そかし
かたちよき君たちの弾正にておはするいと見くるし宮中將なと
のくちおしかりし哉

やまひはむね物の氣あしの氣たたそこはかとなく物くはぬ
十八九はかりの人のかみいとるはしくてたけはか
りすそぶさやかなるかいとよくこえていみしう色しろうかほ
あいきやうつきてよしとみゆるかはをいみしくやみまとひてひたいかみ
もしととなきぬらしかみのたれかかるもしらすおもてあかくて
おさへゐたるこそおかしけれ八月はかり

しるきひとへなよらかなるはかまよきほとにてしを
んのきぬのいとあさやかなるを引かけてむね
いみしうやめはともたちの女房たちなとかはるかはるきつつ
いといとをしきわさかなれいもか

くやなやみ給なと事なしひにとふ人もあり心かけたる人は誠にい
みしとおもひなけき人しれぬ中などはまして人めおもひてよるに
もちかくもえよらす思ひなけきたるこそおかしけれいとるはしくなかきか
みをひきゆひて物つくとおきあかりたる氣色もいと心
くるしくらうたけなりうへにもきこしめし御と經のそこの

こゑよきたまはせたれは
とぶらひ人とももあまた
見きて經ききなとするもかくれなきにめをくはりつつよみぬ
たるこそつみやうらんとおほゆれ

心つきなき物物へもゆき寺へも詣日の雨つかふ人の我をは人おも
はずなにかしこそたたいまの人なといふをほのききたり人よりは猶すこしに
くしとおもふ人のをしはかり事うちすすするなる物うらみし我からこなるこ
ころあしき人のやしないたるこ見るはそれかつみにもあらねと
かかる人にしもとおほゆるにやあらんあまたあるか中に此君をはお
もひをとし給ひてやにくまれ給よなとあららかにい
ふちこはおもひもしらぬにやあらんもとめてなきまとふ心
つきなきなめりをかなになりても思つしろみもてさはくほとに中々なる

事こそおほかめる侘しくにくき人におもふ人のはしたなくいへと
そひつきてねんころなるいささか心ちあしなといへはつね

よりもちかくふして物くはせいとをしかりその事となくおもひたるに
まつはれついでついでついでと持てまどふ

宮つかへ人のもとにきなとする男のそこにて物くう

こそいとわるけれくわする人もいとくしおもはん人のまつなと心さしあり
ていはんをいみたるやうにくちをふたきてかほおもてのくへき

にもあらねなくひおるにこそはあらめいみしうゑいなとしてわり
なく夜ふけてとまりたりともさらにゆつけたにくはせし心もなか

りけりとてこそはさてありなんさとにて北面よりしいたして

はいかかはせんそれたになをそある

はつせにまうてつほねにゐたるにあやしきけすともうつしるをさしま
せつつゐなみたるけしきこそないかしるなれいみしき心をこしてまい
りたるに河の音などのおそろしきにくれはしをのほりこうして

いつしか佛の御かほをおかみ奉らんと

つほねにいそきいりたるにみのむしのやうなる物の

あやしきぬきたるかいとにくき立ゐぬかつきたるは

をしたふ

しつへき心ちこそすれいとやんことなき人

のつほねばかりこそまへはらひてあれ

よろしき人はせいしわつらひぬかし

たの

もし人のしをよひていはすねはそこもすこしされなともいふほとこそあれ

あゆみいてぬれはおなじやうになりぬ

いひにくき物人のせうそこ仰事などのおほかるをつ

ゐてのままに始よりおくまていとひにくし返事又申にくしはつかしき

人の物おこせたる返事おとなになりたる子のおもはずなる事きき

つけたるまへにてはいといひにくし

四位五位は冬六位は夏殿あすかたなとも

しなこそ男も女もあらまほしき事なめれ家の君にて

あるにもたれかはよしあしをさたむるそれたに物みしりたるつかひ人い

きてをのつからいふへかめりましてましらひする人はいとこよなしねこのつ

ちにおちたるやうにて

人のかほにとりつきてよしと見ゆる所は日ごとに見れと

あなおかしとみゆれゑなとはあまたたひ見つれば

めもすらすかしちかくたてる屏風のゑなとはいとめてたけれと見もや

られず人のかたちはおかしうこそあれにくけなる

てうとの中にも一つつよき所のつねにまもらるるにくきもさ

こそはあらめとまもらるるこそ侘しけれ

たくみの物くふこそいとあやしけれしんてんをたてて東

のたいたちたる屋をつくるとてたくみともみなみてものくふをひんか

しおもてにいてゐて見ればまつもてくるやをそきとしる

物とりてみなのみてかはらけはついすへつつきにあはせをみな

くひつれはおものはぶようなめりとみるほとにやかてこそうせに

しか三四人あたりし物のみなさせしかはたくみのさるな

めりとおもふなりあなもたぬなのともや

物語をもせよむかし物語もせよさかしらにいらへうちしてこと人とものいひ
まきはす人いとくし

ある所に中の君とかやいひける人のもとにきみたちにはあらねともその心
いたくすきたるものにはれ心はせなとある人の九月はかりにいきてあり
明の月のいみしうきりておもしろきなこりおもひいてられんと
とをくみくるほとにえいはすえ

んするほとなりいつるやうに見せてたちかへりたてしとみあひたるかけ
の方にそひたちて猶ゆきやらぬさまもいひしらせんとおもふ
にあり明の月のありつつもとうちいひてさしのそきたるかみ

のかしらにもよりこす五すんはかりさかりて火ともしたるやうなる

月の光もよほされておとろかるる心ちしければやをらたち出にけ

りとこそかたりしか

女房の罷いてまいりする人の車をかりたれば心よそひした

るかほにうちいひてかしたる牛かひわらはのれいのしよりも下さま

にうちいひていたうはしりうつもあなうたてとおほゆかしおのこともなと

のむつかしけにいかて夜更ぬさきにゐてかへり

なんといふは猶忍ぶ心をしはかれてとみの事なりとまたいひふれんと

おほすなりとをの朝臣の車のみや夜中曉わかす人ののるにいささ

かさる事なかりけんよくそをしへならはしたりしか道にあひたり

ける女車のふかき所にとし入てえ引あけて牛飼腹立ければ我

従者してうたせければまして心のままにいましめをきたりとみえた

り

すきすきしくてひとりすみする人のよるはいつこにありつらん曉

にかへりてやかておきたるまたねふたけなるけしきなれと硯とりよせて

すみこまやかにをしりてことなしひにまかせてなどはあらず

心ととめてかく

まひろけすかたおかしうみゆるききぬと

ものうへに山吹紅などをそきたるしるきひとへの

いたくしほみたるをうちまもりつつかきはててまへなる人にもと
らせすわさとたちてこてのりわらはをつきつきしき

を身ちかくよひよせてうちささめきていぬる後もひさ

しくなかくて經のさるへきと所々なと忍やかにくちすさ

ひにしゐたりおくのかたに御てうつかゆなとしてそその

かせはあゆみいりてふつくゑにおしかかりて文をそみるおも

しろかりける所々は打すんしたるもいとおかしてあらひ

てなをしはかりうちきて六巻をそ空によむ誠にいとたうとうと

きほとにちかき所なるへしありつるつかひうちけしきはめはぶ

とよみさして返事に心いるこそいとをしけれ

きよけなるわかき人のなをしもうへのきぬもかりきぬもいとよくてきぬかち

にそてくちあつくみえたるか馬ののりていくままに本なるわらはのたて文を

めを空にてとりたるこそおかしけれ

まへの木たちたかう庭ひろき家の東南のかう

しともあけ渡したれはすすしけにすきてみゆるにもや

に四尺の木丁たて前

にわらうたをきて卅よはかりの僧のいとにくけな

らぬかうすすみの衣うす物のけさなといとあさやかにうちさう

そきてかう染のあぶきうちつかひせんすたらによみぬたり物の

けにいたうなやめはうつすへき人とおほきやかなるわらは

かみなとのうるはしきすすしのひとへあさやかなるはかまなか

ぬさりいててよこさまにたて

る三尺の木丁の前にあたれはとさまにひねりのきて

いとほそうにはやかなるとこそとらせて

おおとめうちひさきてよむたらにもいとたうとし

けせうの女房あまた

ぬてつともまもらへたりひさしくもあらてふるひいてぬねはもとの心

うしなひておこなふままにしたかひ給へる護法もけにたうとし

せうとの内

きしたるほそ冠者ともなどのうしろにぬてうちわするもありみな

たうとかりてあつまりたるもれいの心ならはいかにま

とはん身つからはくるしからぬ事なと

しりなからいみしう侘なけきたるさまの心くるしき

をつき人のしり人などはらうたくおほえて木丁のもと

ちかくゐてきぬひきつくるひなとするかかかるほどによろしと
て御ゆなと北面にとりつくほとを若人々

は心もとなくはんもひきさけながらそひめてくるや

ひとへなとき

よけにうす色の裳となへかかりてはあらず

いときよけなりさるの時にそいみしうことはりいはせなとし

てゆるして木丁の内にとこそおもひつれあさまし

うもいてにけるかないかなる事ありつらむいとほつ

かしかりてかみをふりかけてすへりいりぬれはしはしとめてかちすこし

していかにさはやかになり給へりやとてうちゑみたるもはつか

しけなりしはしさふらふへきを時のほとにもなり侍ぬへければ

とまかり申て出るをしはし

ほうちはうたうまいらせんなととむるをいみしういそ

けは所につけたる上らうとおほしき人すのもとにゑさり出て

いとうれしくたちよらせ給へりつるしにいとたへかたく思給

へられつるをたたいまおこたるやうに侍れはかへすかへすなんよろこひ

きこえさするあすも御いとまのひまには物せさせ給へなといひ

つついとしうねき御物のけに侍めるをたゆませ給へはさらなんよく侍へきよ

ろしく物せさせ給ふなるをなんよろこひ申侍と

ことはすくなにて出

るはいとたうときに佛のあらはれ給へるとこそおほゆ

れきよけなるわらはのかみなかき

又おほきやかなるか

いなをいておもはずにかみなかきかうるはしき又しらか

かみむくつつけなるなとおほくて

いとなけにてここか

しこにやんことなきおほえあるこそ法師もあらまほしきわさなめれ

親なといかにうれしからんとこそおしはからるれ

見くるしき物きぬのせぬいかたよせきたる人又のけくひしたる人下

すたれきたなけなる上達部の御車れいならぬ人の前に子をゑて

きたるはかまきたるわらはのあしたはきたるそれはいまやうの物

なりつほさうそくしたるものいそきてあゆみきたる法師陰陽師の

かうふりしてはらへしたる又いろいろうやせにくけなる女のかつらし

たるひけかちにやせやせなる男とひるねしたる

何のみるかひにふしたるにかあらん夜るなとはかたちもみ

えず又をしなへてさることとなりたれば我にくけなりとお

きゐるへきにもあらずかしつとめてとくおきいぬるめやすしかし

夏ひるねしておきゐたるいとよき人こそいますこしおかしけれゑせかたち
はつやめきねはれてようせすはほうゆかみもしつへしかたみにうち見かは
したらんほとどのいけるかひなきよ色くるき人のすすしひとへきたる
いとみくるしかしのしひとへもおなしくすきたれとそれはかたはにもみ
えずほそのとをりたれはにやあらん

物くらふなりて文字もかかれずなりにたり筆もつかひはててこれをかきはて
はや此さうしはめに見え心に思ふ事を人やみんするとおもひてつれつれ
なるさとゐのほとかきあつめたるにあいなく人のためひんなきいひすく
しなとしつへき所々あれはきようかくしたりとおもふをなみたせき

あへすこそなりにけれ宮の御前に内の大殿のたてまつり給へりし
御さうしをこれになにかをかかましとうへの御前には史記といふ文をな
んかかせ給へるとの給はせしを枕にこそはし侍らめと申しかはさはえ

よとてたまはせたりしをあやしきをこしやなにやとつきせすおほるかみの
かすをかきてつくさんとせしにいと物おほえぬ事そおほかるや大方これ
は世中におかしき事を人のめてたしなと思ふへき事猶えり出て歌

なとも木草鳥虫をいひ出したらはこそおもふほとよりはわろし心みつ
なりとそしられめ心ひとつにをのつから思ふことをたはふれぬかきつけ
たれは物にたちましり人なみななるへきみみを聞へきものはと思し
にはつかしさなともみる人はし給ふなれはいとあやしくそあるやけにそ
れもことはり人のにくむをもよしといひほむるをもあしといふは心のほと
こそをしはかりたれた人に見えけんそねたきや

左中將のいまた伊勢のかみと聞えし時さとおはしたりしにはしのかたな
りしたたみをさしいて物はこのさうしものりていてにけりまとひとりい
れしかともやかてもおはしていとひさしくありてそかへりにしそれより
染たるなめりとぞ

我心にもめてたくも思事を人にかたりかやうにもかきつくれば君の御ため
かるかるしきやうなるもいとかしこしされと此さうしはめにそ心におもふ
事のよしなくあやしきもつれつれなるおりに人やみんとするにおもひて
かきあつめたるをあひなく人のためひんなきいひすこししつへき所々あ
れはいとよくかくしをきたりとおもひしを涙せきあへすこそなりにけれ
宮の御前にうちのおととの奉らせ給へりけるさうしをこれに何をかかかま
しとつへの御前には史記といふ文をなん一部かかせ給ふなり古今をやかか
ましなどの給はせしをこれ給て枕にし侍らはやとけいせしかはさらはえよ
とて給はせたりしをもちてさとにまかり出て御前わたりのこひしく思ひ出
らるる事あやしきをつしやなにやとつきせすおほかるれうしをかきつくさ

んとせしほとにいと物おほえぬことのみそおほかるやこれは又世中におかしくもめでたくも人のおもふへき事をえりいてたるかはた心ひとつに思ふ事をたはふれにかきつけたれは物にたちましり人なみなみなるへき物かはとおもひたるにはつかしなとみる人のの給らんこそあやしけれ又それもさる事そかし人の物のよしあしいひたるは心のほとこそおしはからるれたた人にみえそむるのみそ草木の花よりはしめて虫にいたるまでねたきわさなるなに事もたた我心につきておほゆる事を人の語歌物語世のありさま雨風霜雪の上をもちひたるにおかしくけうあるもありなん又あやしく事かかる事のみけうありおかしくおほゆらんとそのほとのもしらはつみさり所なしさて人なみなみに物にたちましらはせみせひろめかさんとはおもはぬ物なれば糸せにもやさしくもけしからすも心つきなくもある事ともあれとわさととりたてて人人しくひとのそしるへき事もあらず上の歌をよみたる歌を物おほえぬ人はそしらすやはあるかりのこくはぬ人もあめり梅の花をすさましと思人もありなんさいけのこはあさかほの引すてすやは有けるさやうにこそはをしはからめけになまねたくもおほえぬへき事そかしされと猶此する事のしらぬはかりこのましくてをかれぬをはいかかせんする權中將のいま伊勢守と聞えし時におはしたるにはしのかたなるたたみをしてすへたてまつりににくき物とはさうしなからのりて出にけりまとひてとらんとするほとになかやかにさしいてんかひなつきもかたはなるもおもふにけしきの物かなととりてやかてもておはしにしよりありきはしめてなりまさの式部の君なとつきき聞てありきそめてかくわらはるるなめりかしと

枕草子は人ことに持たれとも誠によき本は世にありかたき物也これもさまざまはなけれと能因か本ときけはむけにはあらしとおもひて書つつしてさぶらぶそ草子からも手からもわるけれとこれはいたく人などにかさてをかれさぶらぶへしなへておほかる中になのめなれと猶この本もいと心よくもおほえさぶらはすさきの一條院の一品の宮の本とて見しこそめてたかりしかと本にみえたりこれかきたる清少納言はあまりいうにてなみなみなる人のまことしくうちたのみしつへきなとをはかたらはすえんになまめきたる事をのみおもひて過にけり宮にも御世おとろへにける後にはつねにもさぶらはすさるほとにうせ給ひにければそれをうき事におもひてまたことかたさまに身をおもひたつ事もなくて過しけるにさるへくしたしたのむへき人もやうやうせはてて子なともすへてもたさりける儘にせんかたもなくて年老にければさまかへてめのとこのゆかりありて阿波國に行てあやしきかややにすみけるつとりといふ物をほうしにしてあをなといふ物ほしにとに出てかへるとて昔のなをしすかたこそおもひ出らるれといひけんこそ猶ふ

るき心のこれりけるにやとあはれにおほゆれされは人のをはりのおもふ
やうなる事わかくていみじきにもよろなりけるとこそおほゆれ

(枕草子：能因本、清少納言原著)：松尾聡編、東京：笠間書院、1971刊、笠間影印叢刊
9-10)